41697
教科書文庫
4
810
41-1927
20000
19637

資料室

教科書文庫
4
810
41-1927
2000019637

375.9
Sa9

昭和二年十二月六日
濟定檢省部文
用科語國校學中

第二讀本

廣島高等師範學校教授
文學士
藤清衛編

二卷

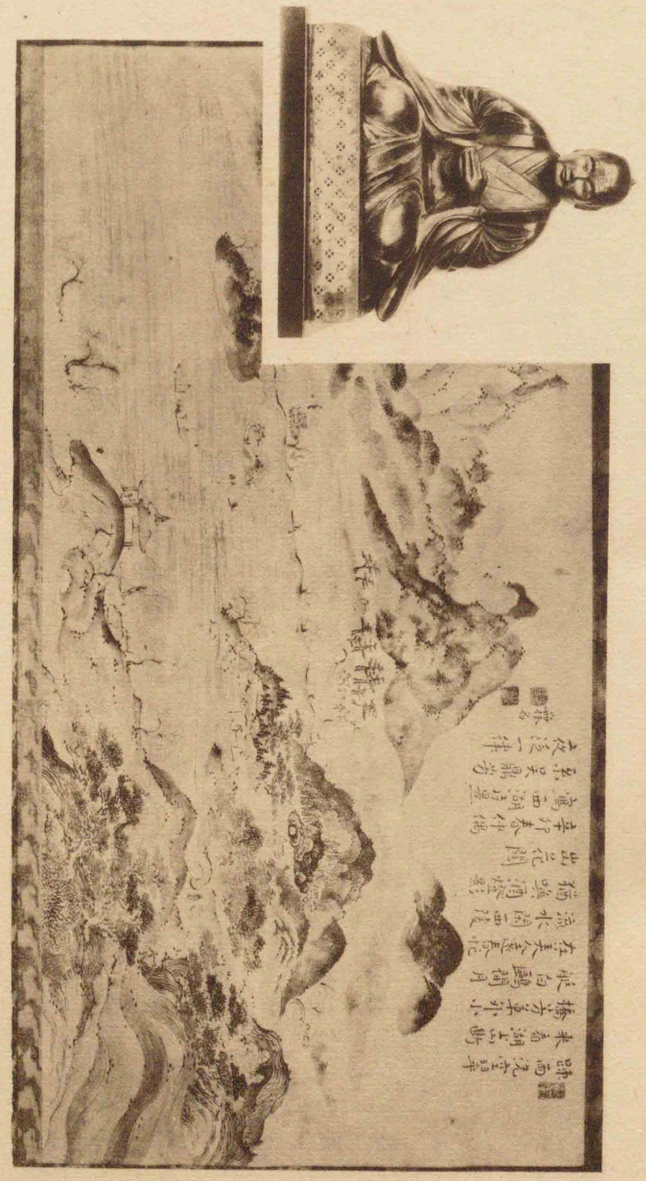
広島大学図書
2000019637

東京
野星書店

少年期より青年期に移り
ゆる年若き人々並びにその
父兄の人々のために

廣島大學圖書之印

広島大学 教 19637 図書



品作と像の雅大池

はしがき

本書(全五卷)は、中等程度諸學校在學諸君の補助讀本にといふ積もりで、明治・大正の名文家の文章を拔萃編輯して見たものであります。

從つて出來るだけ、材料上における諸他正讀本との重複を避けるとか、原作の上に假名遣や用字上の統一をつけるとかいふ一般上の用意を怠らなかつたことは勿論の事でありますが、本書を諸君の讀本とするため殊更、編者の考慮した所は、第一に何より、本書をしてあり來りの教科書型から救ひ、重苦しく暗い感じを除き、許す限りに明かるく氣持よい書物に作つて見たいといふ點でありました。しかしもと〳〵教科用としてであるため、到底その期待どほりに仕上げることは出來かねましたが、幾分その奏效を見得たことは茲に信じて疑ひません。

なほ、些か細目に亙つて配慮の一端を列擧して見ますと、

一　過剰と思はれるほどまでに教材の量を豐富にして、任意その中から選擇取捨して學習し得る餘裕を殘しておいたこと。

一　取材の原書並に作家に就いては、必ずしも廣く普く及ぶことを趣旨とせず、編者の書架にあつて平素愛讀してゐる書籍の中から任意、自由な心持で拔萃したこと。（從つて本書に漏れた他作家の手になつた好材料は、これを他日別集において輯錄し更にその完成を期したいと思つてゐること。）

一　思想的文藝的材料において比較的高尚のものを取入れ、以て鑑賞教材に資する樣に用意しておいたこと。

一　教材の配置の上に幾分類纂的方法を採用したこと。なほ卷一においては童心的材料、卷二においては自然鑑賞的材料、卷三においては自己反省的材料のそれ〴〵を重んじて、おのづから學生諸君の心境の展開と一致調和せしめることに注意したこと。

一　卷三より始めて、作者の關係を重視し、卷四、卷五の兩卷においては、專ら作者別に教材を配列したのも（順序は年齡の若さによる）勿論右の趣旨に基くもので、それ〴〵各代表作を抄出する事は性質上許されなかつたまでも、各特色ある章篇を網羅することに特に努力したこと。以上。

最後に、本書中に作品を抄出させて頂いた各作者諸家に對し厚く謝意の一端を表し、併せて特に、教科書としての本書の性質上、語法及び文字上に多少の改竄を施さざるを得なかつた編者の僭恣と獨斷についてこれを諒とされる寛恕の程を切に希ふ次第であります。

編　者

目次（卷二）

はしがき

—春季の自然鑑賞—

一　北國の初春　室生犀星　一
二　青木（詩）　大木篤夫　四
三　花壇を眺めながら　相馬御風　五
四　青草　前田夕暮　九
五　春日抄（短歌）　吉江喬松　一三
六　晩春の風と綠　一四

——心から心へ——

七 種　荻原井泉水　二一

八 お釋迦さまの燈火　島崎藤村　二三

九 僞孝行　薄田泣菫　二六

一〇 大食と小食　芥川龍之介　三一

一一 虱　志賀直哉　四四

一二 山の木と大鋸　戸川秋骨　五二

一三 雞自慢　芳賀矢一　五五

一四 簡易生活

一五 童心抄（短歌）　六〇

一六 腦の重さ　六一

——山の趣・山の美——

一七 峠の茶屋　夏目漱石　六七

一八 白樺の湯　林久男　七六

一九 超人の境　松本亦太郎　七九

二〇 富士裾野の村　中村星湖　八二

二一 湖畔を廻りて　前田夕暮　八八

二二 富士山へ登る　木下利玄　一〇二

—生みの土地・生みの人々—

二三 杜の家　吉江喬松　一〇三
二四 父の記憶　宇野浩二　一〇八
二五 お母さん　芥川龍之介　一二四
二六 私の祖母　長谷川二葉亭　一三二
二七 響りん〳〵音りん〳〵（詩）　島崎藤村　一三八
二八 日本だ　同　一三三
二九 父と母と（短歌）　一三九

—名人の話・名器の物語—

三〇 大雅と錦の袋　薄田泣菫　一四一
三一 形　菊池寛　一四五
三二 石段と石碑　薄田泣菫　一五一
三三 徒然草　一五六
三四 古名匠の言　佐々木信綱　一六三
三五 良寛和尚の習字法　相馬御風　一六七

—凋落より再生へ—

三六 しぐれ　室生犀星　一七三

三七 冬の日（短歌） 一七八
三八 落葉 島崎藤村 一七九
三九 枯林 吉江喬松 一八三
四〇 雪（詩） 堀口大學 一九〇
四一 雪 芳賀矢一 一九三
四二 沼のほとり（詩） 白鳥省吾 一九六
四三 春の雪 相馬御風 一九八

目次終

廣島大學圖書之印

―春季の自然鑑賞―

一 北國の初春

わたしのこんど移つた家は、町から言へば郊外のやうな、蕭殺たる對岸の胡桃林のある崖に向かつた川岸の家である。日あたりがよいのでわたしは、一鉢の植木を日の中へ出し、そこに臥ころんでわたしのいはゆる日向遊びをした。日向ぼつこでない、日向遊びである。日向ぼつこは長い間樂しめるものであるが、この日向遊びは消えやすく變はりやすいお日樣を對手にするからである。わたしの友だちである一鉢の棕梠竹のみどりを擴げた姿は、濃いいかげを疊の上に停めながら無爲なわたしを慰めてくれた。と、言ふと少しハイカラであるが、全くわたしの友だちはこの植木一

鉢だつた。わたしは陰では五十度しかない四月の室の中の寒暖計を、日のあたるところへ持出し、赤い線が八十度くらゐに昇るのを臥しながら眺めてゐると、まだ河原や崖やにおける折々の雪景色のなかにも、暖い春が來るやうで樂しかつた。さう言へば、寒暖計さへわたしの室では全くの友達だつたのである。

そしてわたしの考へたことは、こゝ十二三年の都住まひ以來、今年ぐらゐ稀の歸郷で、春といふ季節をこんなにまで待佗びたことは尠ないといふことだつた。毎日の雪はまだしも、家を半分持つてゆくやうな暴風には、實際わたしの家は川岸ではあるし、潰れはしないかと思ふくらゐだつた。家鳴り、震動といふ程度のものではなく、笊の中にマツチ箱を入れて振廻すやうな音が、毎夜のやうにつゞいて、夜があけると、座敷の障子のすみ〳〵には砥石の子のやうな雪が吹きたまり、室内の溫氣などには消えさうもなかつた。

わたしはうそ寒く佇みながら、指さきでその雪の粉をつゝいて見て、指さきの冷たくなつたのに氣がついて、己れのしたことの寂しかつたことを能く思ひ返した。

が、そんな日のあひまに、三十分くらゐの日光が、からりと晴れあがつて射し出すことがあつた。わたしはそれを御馳走と呼んでゐた。そこで障子をあけて日光の方へ蹋みかゝると、日かげは程もなく外れてしまひ、冷たい雲がいつかゆききしてゐる。見れば、もう一面の雪ぞらだ。

「この御馳走はまるで手もつけないうちから消えてしまふぢやないか？」

折々わたしは怨めしげに、雲のゆききする雪ぞらに、すぐ斑らに白くなりかけた川原の景色をながめながら北叟笑んでかう言つたものだ。わたしのやうに身體の弱いものが、能くこんな寒いと

ころに育つたものだと、泥雪をいぢくる町の子供を見るたびに、曾てこんな土地にゐたこともなかつたもののやうに不思議に感じた。」

川原に向かうた二階家はどの家も、雨戸を開けてあるところがなく、みな森閑たる冬がまへのまゝであつた。たまに通行人が、わたしのゐる二階のあけ放たれてゐるのを見ると、大きな聲で、さも不思議さうに怒鳴つては行過ぎたりした。

「えらい元氣な家*やな、障子まであけ放*しとる！」

全く春とはいへ、名ばかりな景色である。」

—室生犀星—

註—稀の歸郷云々。作者が關東大震災の結果、郷里金澤市に歸つたこと。
家やな。放しとる。いづれも方言で「家だな」「放してゐる」の意味。

二　青木

雪解の泥になやみゐて、

ほれ〴〵と眺め入りけり、
路ばたの青木の木の實
つら〳〵と眞青なる、
眞赤なる。

—大木篤夫—

三　花壇を眺めながら

雪が消え、霜も下りなくなつた春の花壇に、日一日と伸びてゆく草花の芽生えを見るのは、數多い春の樂しみのうちでも最も清く、且貴い樂しみの一つである。言ふまでもなく、私達が花壇にさまざまの草を植ゑ育てるのは、いづれもそれらの草の花を眺め樂しまんが爲である。しかし、それと同時に單に花だけを樂しむのが私達の唯一の目的であるならば、私達は何もそんなに多くの時間

を費して、土を耕したり、種を蒔いたり、肥料を施したり、水を灌いだりするやうな面倒な世話をしなくてもよいわけである。何となれば、私達は花だけを眺めて樂しまうと言ふならば、その折々に花の咲いてゐる草や木を植木屋から買つて來ても事足りるし、知人の家から貰つて來ても充分それだけの目的が達せられるからである。しかも、さうした方が寧ろ面倒くさくもなく、費用もはぶけるのである。

けれども、さうした簡便な方法で草花の美しさを樂しむ事よりも、寧ろ面倒な手數のかゝる方の仕方で草花を育てる事の方が、私達にとつて、より多く樂しいといふのは、そこには單に花だけを樂しむと言ふ以外の樂しみがあるからである。卽ちそれは培養すると言ふこと、そのことに伴うた樂しみである。今假に、花を咲かせると言ふ事を結果と見、播種から開花に至るまでの培養を經過

と見るならば、私達が手づから花壇をつくり、種を播き、芽を出させ、それを培ひ養つて行く事の樂しみは卽ち經過の樂しみである。そしてほんの小さな草でも、それを出來るだけよく育てて行かうとするには、その草に對する私達の愛がなくてはならない。此の意味で、其の所謂經過の樂しみは、卽ち愛の歡びである。それは眞實に愛すること其の事に伴なふ歡びである。この歡びは、開花といふ結果だけを樂しむ人達の、とても味はふことの出來ない、深い、清い、貴い歡びである。

更に、此の事を單に見て樂しむと言ふ方面から考へても、簡便に、花の咲いてゐる草や木を、その折々に他から持つて來て眺め樂しむよりも、面倒ではあるが自分の手で花壇をつくり、種を播き、芽を出させ、生長させ、花を咲かせ、更に又來年のために種を採つて蓄へるといふ風にした方が、測り知るべからざる多量の、そして深い樂

しみがある。何となれば、草花の美しさは、單に開花期にのみ限られてはゐないからである。卽ちいかなる草にも、芽生えには芽生え獨特の美しさがあり、生長の期間にはその期間獨特のさまざまな複雜した美しさがあり、開花期には無論それ獨特の美しさがあり、更に花が散り、葉の枯れた結實期に於いてすら、心をとめて味はへばそこにはその時獨特の風情のあるものである。そして自ら播き、みづから慈しみ育てることと、そのことに伴なふところの私達の心の歡びに加へて、さうした眼で見て樂しむことの出來る其の折々の草の美しさを、細かに味はつて行くことは、到底簡易に開花といふ結果だけを樂しんでゐる人達の持ちえない恩惠である。而も亦その折々に、草木の持つところの特色を、出來るだけ健康に出來るだけ完全に發揮させてやることそれみづから、私達にとつては貴い樂しい義務なのである。

だが、私達は草花を培養することについて覺り得たところの此の眞實を、單に草花の培養にのみ限られたことだと思つてはならない。それは、實に何ものにとりてよりも、私達みづからの生活にとりて、最も大切な眞實だからである。卽ち、草花の生長から學び得た眞實は、何よりも明きらかに私達みづからの生長にとりての眞實なのである。

—相馬御風—

四　靑草

感覺的で明かるい聲が、林の方で響くと、野芝を踏みつける跫音がして、四五人の少女が、鞠のやうに駈けて來て、皆殆ど同時に、野の日だまりの窪地に體をたゝきつけるやうにして、坐つてしまつた。そして、いかにも樂しげな高い聲をあげて笑ふのである。

少女たちの體のまはりは、一面に水つぽい春の軟草だ。こゝろもち黄いろみがゝつたうすい綠いろに濡れて、日の方へその軟かい葉を立ててゐるのであつた。

少女の一人は、草の上にながゝと、白つぽいうすい絹の襪をはいた足を投出してゐたが、どう思つたのか、坐つたまゝで、片方の足を曲げたかと思ふと、踵の高い短靴を脱いで、二三間さきにぽんと投げた。と、もう片方の靴も殆ど同時に脱いで、またぽんと草の上に投げた。そして何のことはない、薄い皮膚でも破裂したやうに聲高く笑つた。

すると、他の少女も同じやうに坐つたまゝ足をなげては靴を脱ぎ、靴を脱いではぽん〳〵と投出して、一齊に高い聲をたてて、手をたゝいて笑つた。

すると今度は、一人の年嵩の少女が、空いろの襪を、植物の皮でも

剝ぐやうにする〳〵とぬいで、そこに何も着けてゐない裸の足をあらはに投出した。裸の足は野の風をぢかにひやりと感じて、其の白い繭のやうな指をちよつと顫はしたが、すぐに馴れてしまつて、日の光のなかでつや〳〵とうすい光をさへ放つてゐるのである。

他の少女も忽ちにして皆足を裸にしてしまつた。そして、皆樂しげに水つぽい冷たい草の上に投出して、お互に顔を見合はせてまた聲高く笑ふのであつた。

一人の少女がふと立上がると、他の少女も殆ど直覺的に立上がつて、一言の言葉をかはす必要もなく、心から心へ、若い歡びが波動して、忽ちに丸い輪がつくられて、其處に裸のまゝなる舞踏がはじめられた。

野の春の軟草のなかには蘖がまじつてゐた。禾本科のすい

すいとした草の葉もあつた。苜蓿の葉もすべ〳〵とした光澤をみせて生えてゐた。」

少女らの白い軟かな足裏は、輕いリズムを刻んで、これらの草を容赦もなくぢかに踏みつけた。踏みつけられる毎に、草は、人間の足の感觸を痛い程感ずるのである。一足踏みつけられて起上がらうとするひまもなく、彈力のある白護謨のやうな重い壓力が葉や莖を押さへつける。そして、其の足裏の皮膚の匂ひを嗅いでゐるひまもなく、もう次ぎの變はつた平つたい冷たい足のうらに踏みつけられてゐる。彼等は歡樂と苦惱とを同時に足裏から味到した。そして、暫くのうちにへと〳〵に疲れて莖といふ莖、葉といふ葉はみな萎へて青く痛々しく地面に俯してしまつた。」

少女の群が去つたあとで、夕日の赤い光が、地べたに踏みにじられた草の一葉ごとに觸れてゐた。草はべつとり疲れたまゝ眠ら

うとしてゐる。

—前田夕暮—

五春日抄

土の上に白き線引きて日ぐれまで子供の遊ぶ春となりけり

—島木赤彦—

新らしき土のにほひの明かるさよ公園に來て春を感ずる

—土岐哀果—

兵營のねむりの喇叭しと〳〵と降り居る雨の中よりきこゆ

—齋藤茂吉—

雨ほそき破垣ちかくひそ〳〵と田を鋤く人の馬叱るこゑ

—北原白秋—

雲ふたつ合はむとしてはまた遠く分かれて消えぬ春の青ぞら

—若山牧水—

六　晩春の風と綠

晴明の時節には、折ふし嵐の烈しく吹起こる事がある。斯樣な日に武藏野へ行つて見ると、丘を越え、林を出で、草の途絶えた赤土の原へ出る事がある。砂塵の捲揚げられる其の樣は如何に不思議に、如何に壯快なる事よ。遠くの原を吹越えて此の草原にやつて來る風は、直に地皮を捲揚げて、其の砂塵をば新綠の森の上へ灑ぎかける。時には地を爬ふやうに立つてゐる土煙が、忽ちにして、隆起し奔騰し、此處彼處に幾條の柱となつて捲揚がり、濛々として天地が爲に小暗くなる。其の中を野飼の馬が高く嘶えて踴つてゐる。風がすこし吹弱ると、今まで空に揚がつてゐた砂塵は、下つて森といはず、林といはず、人家といはず埋もれんばかりにふりかかる。

砂塵の捲揚がる壯觀は平原に於ける一つの特徵である。

此の風を避けて小村の中に入つて見る。家並みが僅につゞいて、小流れに橋が架かつてゐる。其の橋を渡つて行くと、雲がしばし途切れて、空が薄明かるく、自分の影が地上にかすかに映ると思つてゐると、風がまた傍の樫の林を吹いて、砂塵は何處までも追つかけるやうに後方からやつて來る。

今度は小徑を求めて丘の上へ登つて見ると、廣い原の半ばを覆うて立ちのぼる砂塵は、次第に其の門を擴げて、天地の間に何か瞑合する所があるやうに膨らむ。丘を繞つてゐる欅・槻などの薄紅、楢・樫などの銀白、及び白楊・楓などの淺綠の若芽、すべて此の砂塵をあびていた〳〵しく震へてゐる。見たまへ、砂塵は一陣又一陣、間を置いて、狂ひ廻るやうにして襲つて來る。其の度毎に防ぐ術なく、林の樹は、風の荒るゝまゝ、風の襲ふまゝ、前後に搖れ伏してゐる。

風は此をば折らない程度に戯れ狂つてゐる。私は其の風の中に吹かれて立つてゐると、胸が躍つて其の風に乘じ、共に何處までも狂ひ廻りたくなる。天地活動の騒亂の中に立つて、我一人靜かにしてゐる事が出來ようか。」

終日風が荒れ、終日砂塵が起こつてゐると、不思議にも、其の夕方、或は翌日は必ず雨となる。靜かな雨の脚は半日か一日くらゐつづく。昨日の風にひきかへて其の靜かな事、しめやかな事、夜などは軒近く若楓がゆらいで、露をふりこぼす音が聞こえる。風と共に踴つてゐた心は靜かになつて、何となく人が戀しくなる。否、戀しいといふのは稍強い。何人ともなく人が懷しくなる。「愛」の芽は斯かる靜かな境に於いて人の心に萠出づるものであらう。判然と其の所以を解することは出來ないが、氣が沈んで、連りに人の

事が思はれる――。若し機會なるものが人に友人を與へる事がありとするならば、若葉の雨の夜などがそれである。新樹にふりそゝぐ雨の音を聞きながら、燈火の下で、しみ〴〵話に耽けつて見たまへ。人は必ず心の友を得よう。知己の友を得よう。

雨がいつしか小止みとなる。遠くの方で蛙の聲が聞こえる。ほんのりと月が何處かに有ると見えて、稍遠くまで見渡される。風が少し起こつて仄かに樹影が搖れてゐる。連りに人が思はれる。けれど寂しくも悲しくもない。心は肅やかになる。

翌日雨が霽れる。「雨後の緑。また昨日の新緑の森へ行つて見たまへ。前の日の嵐は忘れたやうに木々の葉は悅しげに踊り、群れては何か囁き合つてゐる。そして其の緑の鮮かな事、葉末からは今にも緑の露が滴るかとばかり思はれる。」ふと大きな力が、昨

日の砂塵を降らし雨を灑いで、此の緑をば研上げたのではないかと胸に感じて來る。實に力である。何者にも此の力は溢れてゐる。と思つてゐると、碧い空をふわ〳〵と一片の雲がちぎれて飛び、それが森の上を過ぎる。若葉が暗く明かるく、その陰影が身を包んで不思議な思をさせる。行過ぎるとぱつと明かるく、葉と葉が搖れて日影を零す。其の葉は未だ伸びきらず、淺緑の色を籠めて搖れてゐるのが、如何にも悅しげで、此を見つめてゐると、「わが生は若し、永しへの青年よ。」といふやうな希望が胸に溢れて來る。

げに生命の不思議の力ではないか。昨日まで嵐に吹洒されて白く見えてゐた樹林の頂が、薄紅色に變はり、枯果てたものと思はれた銀杏の老樹に若芽がふいて來る。枳殼の藪は白い花をつけて、微風に搖れて鶫の巣の端をば繞つてゐる。雲は恣に空に舞ひ、風は恣に野山に狂ひ、若芽は恣に伸びて行く。あゝ自由よ、若い心

は新緑の中へ來て踴らずにゐられようか。

「生よ、活動よ、希望よ、そして無限の愛よ、新緑の福音は斯くの如くにして、人の心に非常の力を與へ、非常の惠みを表はす。「森林には永しへの『青春』あり。」との語が眞ならば、卽ち新緑の中には無限の希望と、永遠の生命とがある。――我が生に如何なる慘苦の降りくるとも、我が眼前に開かれたる此の新緑の天地は不斷の樂園では無いか。「神の緑の衣」ならば、我が如き者をも其の中に包みたまふ惠みの豐かなるかな。吾の生かくて永しへに若し。此の惠みは我のみ獨り享くるにあらず。「緑の衣」は廣く我が同胞を包むと思ふと、人の心は靜まつて、深い「愛」を感じて來る――。不思議にも此の時、人は人が懷しくなるのである。

所として造化の御神いまさゞるは無し。います所には卽ち「美」がある。砂塵の起こるにも、塵埃の飛ぶにも「美」のない所はない。

生々として大能力の發展し行く宇宙の姿、新綠は其の最も美はしい形象を人に示すものではないか。「無限の力、無限の自由、無限の愛は其の色の中に溢れてゐる」。

「綠に萠える若草の芽、其の若芽を付けた樹々の枝をば折つて見たまへ。其の尖端からは綠の露が溢れ出るかと思はれる」。流れずばやまじ、行かずば止まらじ、水よ、雲よ、風よ、森よ、吾が生の姿は其のすべてに現はれてゐる。

—吉江喬松—

—心から心へ—

七　種

絶海の離れ島に茂つてゐる或植物が、大陸のものと全く同一種だといふ事實がある。ダ*アウインはかの有名なる進化論に於いて、それは其の植物の種子が波濤を越えて島に流れついたからであると說明してゐる。際涯もなく廣く深い荒海と、小さな〳〵植物の種子、此の對照を考へると、一つの神祕といつてもいゝ位である。然し、かうした事實は天然界ばかりでなく、精神界にもある。法は種子である。時は波濤である。或人の心から產み出された法の種が、その時代の人の心には正しく植ゑられる事なく、そのまま幾百年間の時代を越えて、ずつと後代の或人の心の中に流れつ

く、そこで根をおろして新しく茂り初める。さういふ事はたしかにある。眞實に法が傳へられるといふのは、大抵かうした場合であるかのやうにすら私は思ふ。正しく法を傳へんとするならば、必ずしも嗣に依るべきではない。強ひて道を傳へようとする事は、道を誤る事の第一歩である。たゞ堅い種子を殘しておくといふ事が肝要である。久しい時代を越えても、朽ちないだけの堅い殼と強い生命力のこもつた胚子をもつた種子を殘しておいた人人こそ、眞に法の愛護者といふべきである。其の法が眞實なものであるならば、如何に長い時の波濤を越えやうとも、いつかは新しい土に根をおろすに相違ない。

—荻原井泉水—

註—ダアウイン、英國の生物學者で、進化論を唱へ始めた人。（西暦一八〇九—一八八二）

八　お釋迦さまの燈火

太郎よ、次郎よ、お前達はお釋迦さまの話を聞いたことがありますか、お釋迦さまは燈火をつけて歩いた人です。

お釋迦さまが一度燈火をつけたら、そこにも、こゝにも、燈火がつくやうになりました。印度や、支那や、朝鮮ばかりでなく、日本國中に燈火がつくやうになりました。

まあ、お前達はお釋迦さまがどんな燈火をつけたらうと思ひますか。お釋迦さまは印度のある國の若い王子でした。その人が燈火をつけて歩くやうになりました。お釋迦さまの燈火は提灯の燈火でもなく、洋燈の燈火でもなく、電燈の燈火でもありません。お釋迦さまは人の心の奥に美しい燈火をつけて歩いたのです。

お釋迦さまの燈火は、高い塔の上にある燈火のやうに、消えさう

でなか〳〵消えません。お父さんが思ふに、お釋迦さまは今でも燈火をつけて歩いておいでなさるだらうと思ひます。お前達もその美しい燈火が欲しければ、お釋迦さまはきつとお前達にもつけに來て下さるだらうと思ひます。

—島崎藤村—

九　偽孝行

寛文の末に凶年が打續いて、澤山の乞食共が柳原土手に小屋を張つて、お上から下る扶持米を貰つてゐたことがありました。その時分、下谷三枚橋に、年老いた母を背負つて、通行人に物を乞うてゐる一人の乞食がありました。その乞食は、母に着せる着物がないために、自分は垢染みた薄い襤褸衣をたゞ一枚纏うたきりで、偶に慈悲深い人から古着でも惠まれると、それを母に與へて、自分は

偽孝行

相變はらず襤褸衣を一枚纏うたまゝ、寒さに顫へてゐました。母親といふのは業病のため腰が立たなくなつてゐたので、何處へ行くにも、この乞食息子が背負つて、優しく介抱してゐましたので、人人も哀れに思つて、とり分け氣をつけて、情をかけてやつてゐました。すると間もなくこのことがお上に聞こえて、特別に扶持米を持つて來て貰へるやうになり、その上小綺麗な小屋までも建てて貰つて、町内の取締まりには、特にこの親子の乞食に氣をつけて取らせるやうにとのお達しがありました。親孝行の德によつて、この乞食の親子は、仕合はせなその日を送ることが出來るやうになつたのです。

ところが、その後、この話を多くの乞食共が傳へ聞いて、我も〳〵と年老いた母を背負つて物乞ひをすることが流行し出しました。無論これは僞の孝行で、その母親も本當の母親ではなく、乞食同志

がお互に企らんでやつてゐる仕事なのですから、夜になると何處ともなく別れて行くのでしたが、惠まれた米や金錢の分配のことで、互に口論したり、時には摑み合ひの大喧嘩を始めることさへあるやうになりました。

町の老人達はこれを見兼ねて、

「お上を怖れざる不埒な行で御座いますから、何卒相應の御處分をお願ひ申します。」と訴へて出ました。

そこで、町奉行達が會合して、僞孝行者の處分に就いて、評議することになりましたが、その席上で當時名奉行の聞こえ高かつた板倉内膳正重矩が、

「惡事でさへ眞似てしたことは罪が輕いではないか。まして、善事を眞似た者を罰すべき理由はない。殊に親孝行を眞似るなどとは、誠にゆかしい事である。その儘打棄てて置いても、眞實の心

から出ない孝行なら、やがて倦疲れて長くは續かないであらう。」と言ひましたので、その儘打棄てて置くことになりました。

その後、重矩の言葉通り、遂にはその僞孝行も止んで、徒らに人々の笑ひを殘しました。如何にその行が勝れてゐても、誠意のない行爲には價値が無い結果となります。

—小學童話讀本による—

註—柳原土手。江戸市内の地名。萬世橋から淺草橋へつゞく十餘町に亙る土手をいふ。この土手は、享保年間柳を植ゑてから名高くなつた。

下谷三枚橋。下谷は江戸の區名で、今も上野公園のあたりを籠めた一帶の名となつてゐる。三枚橋はその中の地名。

板倉重矩。板倉家は勝重の家康に仕へて江戸奉行京都所司代の職につくや、子孫、同職を襲ふものが多い。重矩は勝重の孫、大阪城番、京都所司代等で名聲をあげた人である。延寶元年歿した、五十七歳。

一〇 大食と少食

廣瀨淡窓は人も知つてゐる如く豐後日田の儒者であつた。ある時養子の青邨が淡窓に訊いた事があつた。

「父上、ちよつと伺ひますが、禮は何から始めたものでございませうな。」

「禮か。」淡窓はきちんと坐つた膝がしらを養子の方へ捻向けた。

「禮は無遠慮から始めるのだね。」

青邨は腹のなかで養父の詞を味はつてみたが、今一つはつきりと意味の解せない點があつた。で、また異つた事を訊いた。

「父上、今一つ伺ひますが、養生の極意はどこにございますでせう。」

「養生の極意か。」淡窓はすぐ返辭をした。「何よりも先づ大喰ひをするんだな。」

青邨はいくらか嘲弄はれたやうな氣味で下がつて往つた。

その後、青邨は廣瀨旭莊に出會つた。旭莊は淡窓の弟で、青邨にとつては義理のある叔父だつた。甥はまた同じ事を訊いた。

「叔父上、ちよつと伺ひますが、禮は何から始めたものでございませうな。」

旭莊は直ぐ返辭をした。

「禮かい。禮なら先づ遠慮から始めるんだね。」

青邨は、いつだつたかの淡窓の答を思ひ出して、どうにも合點がいかないらしかつた。で、立續けに今一つの問を投出した。

「叔父上、序に伺ひますが、養生の極意はどこにございますでせう。」

旭莊は譯もなく答へた。

「養生の極意は食をひかへる事さ。」

青邨はもう我慢が出來なかつた。一方が無遠慮だと言へば、一

方は遠慮だと答へるし、一方は大喰ひだと答へれば、一方は食をひかへるのだと言ふ。屹度親父と叔父きとが馴合つて自分を嘲弄つてゐるのか、さもなければ、二人とも何も知らない喰ひぬけの大馬鹿者に相違ないと思つた。で、幾らか冷かし氣味にわけを話して訊いてみた。

「こんなわけでございますが、父上と叔父上と、どちらが眞實なのでございませう。」

「どちらも眞實だ。」旭莊はきつと甥の顏を見つめて言つた。その言葉によると、兄の淡窓は身體が弱く、食が細いので、始終遠慮勝と少食の損を知つて居る。それと打つて變はつて自分は、健康で、いつも無遠慮と過食とから後悔する事が少なくない。かうして互に自分達の弱みを知つてゐるから、それをお前に繰返させまいとするからの事だといふのだ。

道德や人生觀は多くの場合胃に繫がつてゐるものだ。それが胃病だと一層つよい。　—薄田泣菫—

註—豐後日田、筑後境で筑後川の上流にあたつてゐる地名。

廣瀨淡窓。幼時から漢詩に巧で十二歳の時詠んだものが尾張の儒臣紀平洲を嘆ぜしめたといふ逸話が傳へられてゐる。鄕里で學舍を建て數百名の子弟を敎養した。安政三年歿した、七十五歲。

廣瀨青邨。本姓は矢野氏、豐前國の生まれである。始め淡窓に師事して居り、入つてその養子となつたのである。明治元年京に入り漢學所の長となつた外、諸方の公務に盡瘁し明治十七年歿した。六十六歲。

廣瀨旭莊。兄淡窓の感化をうけて、やはり詩儒となり、終生方々に私塾を開いて子弟を敎養した。文久三年歿、五十七歲。

二　虱

元治元年十一月二十六日、京都守護の任に當たつてゐた加州家の同勢は、折からの長州征伐に加はる爲、國家老の長大隅守を大將

にして、大阪の安治川口から、船を出した。

小頭は、佃久太夫、山岸三十郎の二人で、佃組の船には白幟、山岸組の船には赤幟が立つてゐる。五百石積の金毘羅船が、皆それ〴〵、紅白の幟を風にひるがへして、川口を海へのり出した時の景色は、如何にも勇ましいものだつたさうである。

しかし、その船へ乘組んでゐる連中は、中々勇ましがつてゐる所の騷ぎではない。第一どの船にも、一艘に、主從三十四人、船頭四人、併せて三十八人づゝ乘組んでゐる。だから、船の中は、皆、身動きも碌に出來ない程狹い。それから又、胴の間には、澤庵漬を鱒桶へつめたのが、足のふみ所もない位、ならべてある。慣れない内は、その臭氣を嗅ぐと、誰でもすぐに、吐き氣を催した。最後に舊曆の十一月下旬だから、海上を吹いて來る風が、まるで身を切るやうに冷たい。殊に日が暮れてからは、摩耶颪なり水の上なり流石に北國生

まれの若侍も、多くは齒の根が合はないといふ始末であつた。

その上、船の中には、虱が澤山ゐた。それも、着物の縫目にかくれてゐるなどと言ふ、生やさしい虱ではない。帆にもたかつてゐる。幟にもたかつてゐる。檣にもたかつてゐる。錨にもたかつてゐる。少し誇張していへば、人間を乘せる爲の船だか、虱を乘せる爲の船だか、判然しない位である。勿論その位だから、着物には、何十匹となくたかつてゐる。さうして、それが人肌にさへさはれば、すぐに、いゝ氣になつて、ちく〳〵やる。それも五匹や十匹なら、どうにでも處理のしやうがあるが、前にもいつた通り、白胡麻をふり撒いたやうに澤山ゐるのだから、とても、とり盡くすなどといふ事が出來る筈のものではない。だから、佃組と山岸組とを問はず、船中にゐる侍といふ侍の體は、悉く虱に食はれた痕で、まるで痲疹にでも罹かつたやうに、胸といはず腹といはず、一面に赤く腫上がつて

ゐた。

しかし、いくら手のつけやうがないと言つても、そのまゝ打遣つて置くわけには、猶行かない。そこで、船中の連中は、暇さへあれば、虱狩をやつた。上は家老から下は草履取まで、悉く裸になつて、隨所にゐる虱をてんでに茶呑茶碗の中へ、取つては入れ、取つては入れするのである。大きな帆に内海の冬の日をうけた金毘羅船の中で、三十何人かの侍が、湯もじ一つに茶呑茶碗を持つて、帆綱の下、錨の陰と、一生懸命に虱ばかり、さがして歩いた時の事を想像すると、今日では誰しも滑稽だといふ感じが先に立つ。が、必要の前に、一切の事が眞面目になるのは、維新以前と雖も、今と別に變はりはない。——そこで、ある船の裸侍は、それ自身が大きな虱のやうに、寒いのを我慢して、毎日根氣よく、そこ〻と歩きながら、丹念に板の間の虱ばかりつぶしてゐた。

所が佃組の船に、妙な男が一人ゐた。これは森權之進といふ中老のつむじ曲がりで、身分は七十五俵五人扶持の御徒士である。この男だけは不思議に、虱をとらない。とらないから、勿論、何處と言はずたかつてゐる。髷ぶしへのぼつてゐる奴があるかと思ふと、袴腰のふちを渡つてゐる奴がある。それでも別段氣にかける樣子がない。

では、この男だけ、虱に食はれないのかと言ふと、又さうでもない。やはり外の連中のやうに、體中、金錢斑々とでも形容したらよからうと思ふ程、所まだらに赤くなつてゐる。その上、當人がそれを搔いてゐる所を見ると、痒くない譯でもないらしい。が、痒くつても何でも一向平氣ですましてゐる。

すましてゐるだけなら、まだいゝが、外の連中が、せつせと虱狩を

してゐるのを見ると、必ず、わきからこんな事をいふ。
「とるなら、殺し召さるな。殺さずに茶碗へ入れて置けば、わしが貰うて進ぜよう。」
「貰うて、どうさつしやる。」同役の一人が呆れた顔をしてかう尋ねた。
「貰うてか。貰へばわしが飼うておくまでぢや。」
森は恬然として答へるのである。
「では殺さずにとつて進ぜよう。」
同役は冗談だと思つたら、二三人の仲間と一しよに半日がゝりで、虱を生きたまゝ、茶呑茶碗へ二三杯とりためた。この男の腹では、かうして置いて「さあ飼へ。」と言つたら、いくら依怙地な森でも、閉口するだらうと思つたからである。
すると、こつちからはまだ何ともいはない内に、森が自分の方から聲をかけた。

「とれたかな。とれたらわしが貰うて進ぜよう。」
同役の連中は、皆驚いた。
「ではこゝへ入れてくれさつしやい。」
森は平然として、着物の襟をくつろげた。
「痩我慢をして、あとでお困りなさるな。」
同役がかういつたが、當人は耳にもかけない。そこで一人づゝ、持つてゐる茶碗を倒さにして、米屋が一合桝で米をはかるやうに、ぞろ〳〵虱をその襟元へあけてやると、森は、大事さうに外へこぼれた奴を拾ひながら、
「有難い。これで今夜から暖かに眠られて。」と獨言をいひながら、にや〳〵笑つてゐる。
「虱がゐると、暖かうござるかな。」

呆氣にとられてゐた同役は、皆互に顔を見合はせながら、誰に尋ねるともなく、かう言つた。するとと、森は、虱を入れた後の襟を、叮嚀に直しながら、一應、皆の顔を莫迦にしたやうに見まはして、それからこんな事を言出した。

「各、は皆、この頃の寒さで、風をひかれるがな、この權之進はどうぢや。嘘もせぬ。洟もたらさぬ。まして、熱が出たの、手足が冷えるというた覺えは、嘗てあるまい。各、はこれを、誰のおかげぢやと思はつしやる。――みんなこの虱のおかげぢや。」

何でも森の說によれば、體に虱がゐると、必ず、ちく〳〵刺す。刺すから、どうしても搔きたくなる。そこで、體中萬遍なく刺されると、やはり體中萬遍なく搔きたくなる。所が人間といふものはよくしたもので、痒い〳〵と思つて搔いてゐる中に、自然と搔いた所が熱を持つたやうに溫かくなつて來る。そこで溫かくなつてく

れば、睡くなつて來る。睡くなつて來れば、痒いのもわからない。――かういふ調子で、虱さへ體に澤山ゐれば、睡りつきもいゝし、風もひかない。だからどうしても、虱飼ふべし、狩るべからずだ、といふのである。

「成程、そんなものでござるかな。」同役の二三人は、森の虱論を聞いて、感心したやうに、かういつた。

それから、その船の中では、森の眞似をして、虱を飼ふ連中が出來て來た。この連中も、暇さへあれば、茶呑茶碗を持つて虱を追ひかけてゐる事は、外の仲間と別に變はりがない。唯、ちがふのは、その取つた虱を、一々克明に懷に入れて、大事に飼つて置く事だけである。

しかし、何處の國、何時の世でも、「お先走り」の說が、そのまゝ何人に

も容れられるといふ事は滅多にない。船中にも、森の虱論に反對する「抗議屋」が大勢居た。

中でも、筆頭第一の「抗議屋」は井上典藏の御徒士である。これも亦妙な男で、虱をとると必ず、皆食つてしまふ。夕がた飯をすませると、茶呑茶碗を前に置いて、うまさうに何かぷつり〳〵嚙んでゐるから、側へよつて茶碗の中を覗いて見ると、それが皆、とりためた虱である。「どんな味でござる？」と訊くと、「左様さ。油臭い燒米のやうな味でござらう。」といふ。虱を口でつぶす者は何處にでもあるが、この男はさうではない。全く點心を食ふ氣で、毎日虱を食つてゐる。――これが先づ第一に森に反對した。

井上のやうに、虱を食ふ人間は、外に一人もゐないが、井上の反對說に加擔する者は可成りゐる。この連中の言分によると、虱がゐたからといつて、人間の體は決して溫まるものではない。それの

みならず、孝經にも、身體髮膚之を父母に受く、敢て毀傷せざるは孝の始めなりとある。自ら、好んでその身體を、虱如きに食はせるのは、不孝も亦甚しい。だから、どうしても虱狩るべし、飼ふべからずだ、といふのである。

かういふ行きがゝりで、森の仲間と井上の仲間との間には、時折口論が持上がる。それも、唯、口論位ですんでゐた內は、差支へない。が、とう〳〵しまひには、それが原因で、思ひもよらない及傷沙汰へ始まるやうな事になつた。

それと言ふのは、或日、森が、又大事に飼はうと思つて人から貰つた虱を茶碗へ入れてとつて置くと、油斷を見すまして井上が、何時の間にかそれを食つてしまつた。森が來て見ると、もう一匹もない。そこで、この「お先走り」の珍說漢が腹を立てた。

「何故、人の虱を食はしやつた？」

張肘をしながら、眼の色を變へて、かうつめよると、井上は、

「自體、虱を飼ふといふのが、たはけぢやての。」と、空嘯いて、まるで取合ふけしきがない。

「食ふ方がたはけぢや。」

森は躍起となつて、板の間をたゝきながら、

「これ、この船中に、一人として虱の恩を蒙らぬ者がござるか。その虱を取つて食ふなどとは、恩を仇でかへすのも同然ぢや。」

「身共は、虱の恩を着た覺えなどは、毛頭ござらぬ。」

「いや、たとひ恩を着ぬにもせよ、妄に生類の命を斷つなどとは、言語道斷でござらう。」

二言三言いひつのつたと思ふと、森がいきなり眼の色を變へて、鞘卷の柄に手をかけた。勿論、井上も負けてはゐない。すぐに、朱鞘の長物をひきよせて、立上がる。――――裸で虱をとつてゐた連中

が、慌てて兩人を取押さへなかつたなら、或はどちらか一方の命にも關はる所であつた。

この騒を實見した人の話によると、二人は、一同に抱きすくめられながら、それでも未だ口角に泡を飛ばせて、「虱。虱。」と叫んでゐたさうである。

かういふ具合に、船中の侍たちが、虱の爲に及傷沙汰を引起こしてゐる間でも、五百石積の金毘羅船だけは、まるでそんな事には頓着しないやうに、紅白の幟を寒風に飜しながら、揚々として長州征伐の途に上るべく、雪もよひの空の下を、西へ〳〵と走つて行つた。

―芥川龍之介―

註―安治川。大阪市内を貫流する川。貞享年中河村瑞賢の開いたために有名である。

摩耶。摩耶は摩耶山のことで、兵庫縣武庫郡にあつて六甲山の西南に峙立してゐる。

三　山の木と大鋸

蟲が恐ろしかつた。小鳥の口嘴が恐ろしかつた。

若芽は伸びた。

今度はナイフが恐ろしかつた。杖を切りに來る人がじろ〳〵と其の邊を見廻はしながら通つて行つた。

木は漸く太くなつた。

小鳥が蟲を探しによく來てとまる。今は小鳥が愛らしくなつた。

然し鉈が恐ろしい。木こりが通る。あの腰の鉈でポン〳〵と二度たゝかれゝば自分は胴切にされる。早く太くなりたい。

かう思つてゐる内に又少し太くなつた。鉈はたいして恐ろしくなくなつた。

然し鋸が恐ろしい。早く大きくなりたい。然し急ぐと危ない。細い儘で伸びると風に折倒される。

蟲や小鳥を恐れてゐた若芽からは三十年經つた。あと百年經たねば鋸を全く恐れない自分にはなれない。

或日、杖を取りに來た男が、ナイフで自分の肌にAug. 1915,と彫りつけた。消えないやうにと出來るだけ深く彫りつけて行つた。

自分は微笑した。然しこんな字が、肌に殘つて居る内は安心出來ない。此の彫つた人間が年寄になつて死んで、その孫が又年寄になつて死ぬ時代が來なければ安心出來ない。出來るだけ地から精分を吸はねばならぬ。出來るだけ太陽の光を受けねばならぬ。そして出來るだけ伸びて、出來るだけ太くならう。

百年過ぎた。

もういけないと思ふやうな嵐に何十度か出會つた。南へ延び

過ぎた大きい枝を一本折られたが、幸に命にかゝはる程の傷は受けなかつた。嵐は憎らしい。自分は大きい枝を折られた時には隨分腹を立てた。然し成長以外、一分一厘自身を動かす事の出來ない自分を、その暴力に對し出來るだけ抵抗少ない姿勢にしてくれるものも、やはり嵐自身の力だと思ふと、嵐に惡意はないといふ氣がして今は憎めなくなつた。兎も角もう安心だ。

官林拂下げの引渡しに役人と願ひ人とが來た。

木は何んだらうと思つて上から見下ろして居た。

彼と同年輩の隣の木が、

「何しに來たんだらう。」と彼に聲をかけた。

「小さい木がびく〳〵して居るぢやないかな。」

「早く行つてしまはないかな。」

「おい〳〵、君の根つこへ立つて僕を見上げながら何か言つてゐ

るよ。」

「氣味の惡い奴だな。」

「心配はないよ。」

「おや俺の足を何かで叩いて居るぞ。」

「うん鉈で皮をはいで居るんだ。」

「仕樣のない奴だな。Aug. 2015, かい。」

「矢立を出して何か番號をつけて居る。」

「氣味が惡いなあ。」

「あゝ歩き出した、歩き出した。」

「今晩吹降りでもあると消してくれるんだがなあ。氣味が惡くつて仕樣がない。」

「なに、何んでもないよ。見給へ。大分向かふの方の連中も番號をつけられてるぢやないか。」

「さうだね。だが、どうして君はつけられなかつたらう。」かう言つて隣の木は羨ましさうに彼を顧みた。

一週間經つた。一人の勞働者が其の森に入つて來た。暫く其の邊を見廻はして、いゝ場所を地ならし始めた。其の邊の小さい木を鉈で切始めた。何處からか熊笹を澤山切つて來た。そして三日程かゝつて其處に小さな小屋を建てた。又三日程すると石と泥とで上の丸い小屋程の竈を作つた。願ひ人がそれを見に來た。

「俺は此の木もはいるつもりだつたが、役人の奴は此處までだと言張つたよ。」

「これかね?」と、勞働者は呑みさしの煙管の雁首で番號をつけられずに濟んだ彼を指した。

彼は其の時、何か知らず、身顫ひを感じた。

「それさ。」

「なに、わかるものかね。ついでに切つてしまはうよ。」

「まあ、よせ〳〵。それ一本で盗人つて訴へられるとつまらない。」と願ひ人が言つた。

段々に大きな木が切倒されていつた。竈からは晝も夜も烟が立昇つた。それが立昇らなくなると二三日して、其の中から眞黑になつたきれ〴〵な木の死骸が取出された。それは一纒めにされては傍に積重ねられて行つた。

遂に彼の隣に立つてゐた木が切られ出した。それは見た事のない非常に大きな鋸だつた。一間程の長さで、その兩端に柄がついて居た。腰を下ろした二人が、足を根に踏張りながらそれをひ

いた。ズツ――ズツ、ズツ――ズツと靜かに切進む。その休みない靜かな進行は其の木の死を一層不可抗なものに思はせた。切口には三四本の環鐵のはまつた樫の楔が差してある。勞働者は時々立つて大きな斧の尻で楔を打込んだ。コーン、コーンといふ音は山に響き渡つた。

彼の友は從容として一言も口を利かなかつた。彼は嚴肅な感じにうたれた。

幹は一分傾いた。勞働者は起上がつて、靜かに其の場を離れた。呻きと共に木は倒れて行つた。どうんといふ烈しい地響きがした。其の邊の小さい木や草が煽りを受けて一度に靡いた。そして尙、暫くはザワ〳〵と騷いだ。

それから二月程すると、拂下げられただけの木は炭になり、或ものは用材、又は燃やし木として少しづゝ勞働者のために運ばれて

行つた。其の邊一帶は廣々と明かるくなつた。小さい木等は不意に日光の直射を受けて歡喜の聲を擧げて騷いだ。日なたでは暮らせない羊齒類は、段々に赤く枯始めた。

切株が並んでゐる。彼はそれを眺めながら淋しい氣持になつた。彼には今まで自分のした努力が、これだけで終はるものならといふ感情も起こつた。最初、蟲や小鳥が恐ろしかつた時代から、ナイフ・鉈・鋸と、それ等が一つ〳〵恐ろしいものとして彼の前に現はれて來た事を思つた。小鳥を恐れてゐた時にはナイフを知らなかつた事を思つた。そしてナイフを知つて恐れ出した時には、その上に鉈のある事は考へなかつた事を思つた。鉈の上には鋸があつた。そして總てを通過したと思つた時に、彼は又更に大鋸といふもののある事を知つた。彼にはもう根氣はなかつた。同時に不安も不滿もなくなつた。

然し彼は、過去を顧みて徒勞に歸した其の努力を悔いはしなかつた。徒勞といふ氣もしなかつた。彼には鋸を通過しようとしてゐた時代のあせる氣分は、今は全くなくなつた。そして同時に大鋸を知る前の少しだらけたやうな安心も今はなくなつた。それは如何にも淋しかつた。然し其の淋しさの内に彼は或安定を得た。

—志賀直哉—

三　鷄自慢

何事にも親切が第一である。常識さへあれば、專門の知識は第二若しくは第三の要件である。親切に取扱へば、鷄の如きものの意志も了解される。その個性も認められる。少々の病氣は療治も出來る。鷄が風を引く、冬は足に霜燒をこしらへる。專門の療

治法は知らぬが人間並みの藥を用ふれば、容易に快治する事が出來る。青物を求める。水を望む。卵を生むに日がさして困る。一々彼等の動作でそれが解る。鷄の言葉を解するは一興である。

愛は相互の關係である。餌を手にして柵のうちに入れば、鷄は身邊に蝟集する。後には空手で入つても蝟集する。極めて臆病な性質の彼等ではあるが、かうなると恐れを抱かぬ。脊を撫でても鷄冠を弄つても驚かない。溫柔なのは益、穩やかに、剽悍なのもやさしく取扱ふ。暫時にして何れもよく馴れてしまふ。若しそれ、その一羽々々に名稱を與へ得るやうになれば、それは最も結構な事であらう。

併しながら、動物を愛する者は一種の壓制家である。わが心のまゝに何物をか左右せんと欲するのである。人間が同じ人間の意志を左右することは、普通のものの難しとするところである。

幸に、禽獸は何をされても默從する。此の默從に對して自ら愛が起こる。此の愛が、やがて又他の默從、而も喜んでの默從となる。喜んでの默從は、進んで人間に近づく事をする。頭にとまる、肩にとまる、裾をくはへる。四十羽の雛は斯くの如くして育つた。猫や鷄を引きつれて五百哩の山口から東京へ移轉した二十世紀の*アブラハムは天の使になつてしまつたのである。

この頃言はれてゐる動物の虐待防止とはどんなことか知らぬ。何れは虐待が人情に反くといふのであらうが、人情に反くといふのも、結局人間の不利になるといふ事をのみ意味してゐるらしい。得手勝手は飽くまで人間の本性である。

—戸川秋骨—

註—山口から東京へ。作者の戸川氏が山口高等學校教授の職を辭して上京してきたこと。

アブラハム。創世紀に出て居る人で、チグリス河の下流にあつたカルデヤのウルといふところからカナーンに部衆を率ゐて移住したといはれてゐる。

一四　簡　易

衣食住に簡易である事は、日本人の美德である。上代の衣服には、曲玉の樣な珠をかけた事が見えたが、これとても今日から見れば粗末なもの、しかもそれは高貴な身分の方に限られたらしい。他は概して今日の朝鮮人の樣に、飾の無い白い服だけで、何等の裝飾も無かつた。隨分文明の發達しない野蠻人でも、裝飾を好む國民は、鳥の羽を附けたり、獸の皮を附けたり、貝を飾つたりするが、日本には其の風が無い。本來が食物・住居ともに簡易に甘んずといふ風がある。

文明の進むに隨つて、種々の贅澤の進むのは自然の事で、奈良時代・平安時代と段々生活程度の進んで來たのは事實である。平安時代になつて驕奢（きょうしゃ）に流れたといふ。藤原氏など上流社會の者が

奢侈に流れたことはあつたが、朝廷が驕奢をなさつて下民の怨恨を買はれたといふやうな例は一つもない。皇室は禮儀・道德・風雅等の淵源であつたが、儉約の德に於いても、朝廷がやはり模範となられたのである。

鎌倉になつての幕府の政は、全く勤儉で押通した。賴朝は衣服に於いても、自ら其の例を示して居る。何事も質素簡易を旨とするのが、幕府施政の方針であつた。それ故鎌倉時代の話として傳はつて居るのには、儉約に關することが多い。中にも北條時賴の儉約であつた事は、徒然草に味噌を戸棚から尋ね出して酒を飲んだ話がある。時の執權としては、實に儉約なことである。其の母の松下禪尼が明障子の切張りをしたことも徒然草にある。時賴の用ひたといふ青砥藤綱といふ人が、十文を落として五十文の松明をとぼして拾つたといふ儉約な話も、やはり時代の精神を示し

て居る。儉約をして、何かの時には役に立たさうといふので、平素は麁衣麁食に甘んずるといふことは、武家を通じての教訓である。足利時代になつての各家の家法・家憲ともいふべきものは、いづれも儉素を條文に立ててゐる。

足利將軍の驕奢といつても、何程の事でも無かつたらうと思ふ。金閣・銀閣を見ても大抵は察せられる。總じて、世間の富貴や驕奢に近づくものは、寧ろ下品な所行として擯斥する氣風が、此の時代を支配して居た。卽ち、高尙といふこと、又風流とか風雅とかいふものは、富貴に遠ざかつて、寧ろ簡易な生活に在りとの思想が、流行したのである。俳人は和歌者流に對して起こつた一種の平民的文學者であるが、これも淡泊・洒落を以つて其の道の眞意を得るものとした。足利時代の連歌者流にも、旣に其の氣風が認められるが、芭蕉の說くところ、俳味は奈良茶にありとした。奈良茶といふ

のは茶粥である。俳人中には品性の悪い幇間的の者もあつたが、芭蕉の風流は、淡泊な生涯を風流としたのである。

右の通りであるから、俳人は其の家の飾に美しい金ぴかの物を用ひない。すべてが、閑寂な味を以つてして、一椀の抹茶に一幅の掛物、一輪の花ざしで趣味を其の中に求める。物の多くを望まず、少にして足る。富の眼を眩するを望まず、貧しきを以て安んずる。かういふ淡泊な氣象であるから、人を羨まず、世を恨まない。禪家といひ、俳諧者といひ、いづれも隱遁者・世棄人に似て、實は世間に立交りながら、其の榮華に心を惑はされないといふ境域に達したものである。

佛教は國民を厭世的にするといふが、日本では寧ろ其のよい方ばかりがあらはれた。其の質素の風と、思ひきりのよい所、富貴を超越した點は、武士の決斷及び質素に影響したことが少なくない。

元寇の役の一斷などは、禪宗の安心に由來することが多かつたらうと思ふ。

此の祖先の風は、いつまでも保存しなければならぬ。併し、食ふ物も食はずに儉約するのは、もとより儉約では無い。儉と吝とは似て非なるものとは、昔の人も言つた。積極的に働く爲には、飯も澤山食はねばならぬ。唯、分を守るといふ心得が肝要である。木綿着に慣れ、麥飯に甘んじた老農は、絹布を纏ひ白米を食ふのを勿體ないといふ。此の勿體ないといつて、身の程を守るだけは、いつまでも保存したいと思ふ。「恭儉己ヲ持シ」で、成るべく新らしい贅澤に遠ざからなければならぬ。

—芳賀矢一—

註—北條時賴。北條時氏の子で五代の執權。入道して最明寺に退く。弘長三年卒。年三十七。
松下禪尼。北條時氏の妻。安達景盛の女。時賴の母。
青砥藤綱。北條時賴の臣で引付衆になつた。廉潔剛直、權貴をも憚らなかつたといふ。
芭蕉。松尾宗房の號。伊賀の人で、俳人として名高い。諸國を旅行して、元祿七年十月十二日大阪で死んだ。年五十一。

二五　童心抄

みどり子の肥え太りたる腕短したゞに歡びて湯をたゝき居り
—島木赤彦—

もの投げて聲をあげたる幼兒をこゝろ虛しくわれは見がたし
—齋藤茂吉—

遠足の小學生徒有項天に大手ふり〳〵往來とほる。
—木下利玄—

子供等は列を食出し脇見をしさゞめきやめず率ゐられて行く
—木下利玄—

猫の耳を引つぱりて
にやと啼けば
びつくりして喜ぶ子供の顏かな
—石川啄木—

二六　腦の重さ

人間の腦といふものは、國でいへば中央政府と同じやうなもので、もし國に中央政府がなかつたなら、その國は忽ち混亂して亡びてしまふに相違なく、もし人間から腦といふものを取去つてしまつたなら、その人間は一刻も生きてゐることは出來ない。

腦の模型圖を見ると、腸のやうな長いものをつくねたやうに見えるが、實は深く入込んで曲りくねつた溝のある卵形の塊である。その中でも、中央を縱に通つてゐる溝は、最も深く入込んで、そのため腦は左右に劃られてゐる。腦の上や横の面は、それほどでもないが、下の面は非常に複雜で、色々の部分に分かれてゐる。が、大體は腦の八分の七を占めてゐる大腦、その後下にあつて、大腦が被つてゐる小腦、それから大小の腦の下から出て、脊髓に入る太い紐の

やうな延髄、この三通りに分かれる。眉毛から顳顬にかけて頭をめぐる線の上は、皆大腦の容物で、後頭の出張つたところの内側に小腦があり、その下から首筋にかけての部分が、延髄から脊髄に移るところである。

人間が萬物の長であるといふのは、この腦、卽ち精神の働きが、他のどの動物よりも發達してゐるからである。精神の働きが發達してゐるといふことは、中央政府で言へば、事務が繁忙であることで、事務が繁忙であれば、役人が多くなければならず、從つて役所の建物も廣くなければならない。人間の腦ではこの役所の建物が、他のどの動物よりも廣く、そして完備してゐるといふことになる。けれども、腦をたゞ廣くして、表面を必要なだけの廣さにすると、頭ばかり無闇に太くなつて、福助のやうな醜いものになるから、皺を作つて、腦の太さはそれほど大きくなくても、容積を廣く取つて、う

まく體の釣合をとつてあるのである。つまり、三階建にも四階建にも出來る家を、面積ばかり廣く取つて平家建にする必要はないので、そこへ行くと人間の腦は、他のどの動物よりも體の割に大きく、皺が深くなつてゐて、まづ理想的な建物と言つてよい。

この「體の割に」といふことが、最も大切な條件で、むろん鯨などは、人間よりもずつと大きな腦を持つてはゐるが、利口な點では、到底人間の脚下にも及ばない。かういふ體ばかり大きくて、精神の働きの鈍い動物は、平家建の腦を持つてゐるのである。しかし、人間の中にも平家建の腦を持つてゐないものが無いとは言へない。

ある學者の計算によると、魚は體重の一萬分の二、蛇は一萬分の八、鳥は一萬分の四十二、牛や馬の類は一萬分の五十の重さの腦を持つてゐるさうであるが、人間となるとずつと多くなつて、一萬分の二百七十三の割になつてゐる。

同じ人間でも、英國人が平均三百七十一匁、獨逸人が三百六十六匁、日本人が三百六十四匁、フランス人が三百六十三匁、支那人になると少し下つて三百五十五匁、ヒンドウ人の土人などは三百十九匁しかないさうである。フランス人が日本人より利口でないかどうかは別として、此の腦の重さで見ると日本人種は歐米人種に比較して何れかの部面に短所をもつてゐないとも限らない。ともあれ日本の人種を改良して、もつと腦の重さを增したいものである。

世界的の偉人といはれた人の腦の重さは、普通の人間に比べると、ずつと重い。尤も世界的の偉人といはれるやうな人は、もう夙くの昔に死んでゐて、一々その人達の腦の重さを計つて見た譯ではないから、さう頭からきめてしまふ事は出來ないが、今までに計られた分から推定すると、どうも確からしい。英國の詩聖バイロ

ン卿は二二三八グラム、同じく英國の大政治家クロムウエルは二二三三グラムの重さがあつたさうである。かういふ人は普通の人の二倍もある。しかし稀には例外があつて、對數表を編んだガウスといふ有名な數學者は、普通の人の腦と變はりがなかつたさうである。これは腦の一部だけが特に發達してゐたのであらう。それゆゑ、かやうな人は、他の點では凡人にも劣るやうな沒常識なことをしたかも知れない。白痴、卽ち馬鹿になると、わづか九〇〇グラムしかないのがある。男と女と比べると、日本人では男が平均一三六七グラム、女が一二一四グラムであるが、これで見ると男は女よりも少しは智慧が多いらしい。これは何千年何萬年かの間に、だん〳〵女が男から征服されて、智慧を働かせる必要を無くされてゐたからで、現在のやうに、女があらゆる仕事に、男に取つて代はらうとする世の中では、腦の重さも遠からず男を凌ぐほどの

重さになるであらう。

—小學童話讀本による—

註—**ヒンドウ人**。印度人のこと。

バイロン。英國の有名な詩人。(西暦一七八八—一八二四)。

クロムウエル。英國の政治家で共和政治の統領をしてゐた。(西暦一五九九—一六五八)

ガウス。獨逸の人で我が國に現在行はれてゐる對數表をあんだ人であるが、これは廣く有名なガウスといふ人とは違ふ。有名の數學家のガウスはフリードリッヒ・ガウスといつて、西暦一七七五年から一八五五年までの人である。但しこの人は對數表をあんだ當人では無論ない。

—山の趣・山の美—

一七 峠の茶屋

峠の中腹まで登つた時、空があやしくなつて來た。煮えきれない雲が、頭の上へ靠れ懸かつてゐたと思つたが、いつの間にか崩れ出して、四方は只雲の海かと怪しまれる中から、しと〳〵と春の雨が降出した。菜の花は疾くに通り過ごして、今は山と山との間を行くのだが、雨の絲が濃やかで、殆ど霧を欺く位だから、隔たりはどれ程かわからぬ。時々風が來て、高い雲を吹拂ふ時、薄黑い山の脊が右手に見える事がある。何でも谷一つ隔てて向かふが、脈の走つて居る所らしい。左はすぐ山の裾と見える。深く罩める雨の奥から松らしいものが、ちよく〳〵顔を出す。出すかと思ふと、隱

れる。雨が動くのか、木が動くのか、何となく不思議な心持だ。

路は存外廣くなつて、且平だから、歩くに骨は折れんが、雨具の用意がないので急ぐ。帽子から雨垂れがぽたり〳〵と落ちる頃、五六間先から、鈴の音がして、黑い中から、馬子がふうとあらはれた。

「こゝらに休む所はないかね。」

「もう十五丁行くと茶屋がありますよ。大分濡れたね。」

まだ十五丁かと、振向いて居るうちに、馬子の姿は影畫の樣に雨につゝまれて、又ふうと消えた。

糠の樣に見えた粒は、次第に太くなつて、今は筋毎に風に捲かれる樣までが目に入る。羽織はとくに濡盡くして、肌着に浸込んだ水が、身體の溫度で生暖かく感ぜられる。氣持がわるいから、帽を傾けてすた〳〵歩く。やつとのこと茶屋らしい家の前まで來た。

「おい。」と、聲を掛けたが返事がない。

軒下から奥を覗くと、煤けた障子が立切つてある。向かふ側は見えない。五六足の草鞋が淋しさうに庇から釣るされて、屈託氣にふらり〳〵と搖れる。下に駄菓子の箱が三つ許り並んで、そばに五厘錢と文久錢が散らばつて居る。

「おい。」と、又聲をかける。土間の隅に片寄せてある臼の上に、ふくれて居た鷄が、驚いて眼をさます。クヽヽ、クヽヽと騷ぎ出す。敷居の外に土竈（トベツツ）が、今しがたの雨に濡れて、半分程色が變はつてゐる上に、眞黑な茶釜がかけてあるが、土の茶釜か、鐵（カナ）の茶釜かわからない。幸、下は焚きつけてある。

返事がないから、無斷でずつと這入つて、床几の上へ腰を卸した。鷄は羽搏きをして臼から飛下りる。今度は疊の上へあがつた。障子がしめてなければ、奥まで驅けぬける氣かも知れない。雄が太い聲でこけつこつこといふと、雌が細い聲でけゝつこつこといい

ふ。丸で余を狐か狗の様に考へてゐるらしい。床几の上には一升桝程な煙草盆が閑靜に控へて、中にはとぐろを捲いた線香が、日の移るのを知らぬ顔で、頗る悠長に燻ぶつて居る。雨は次第に收まる。

しばらくすると、奥の方から足音がして、煤けた障子がさらりと開く。なかから一人の婆さんが出る。

どうせ誰か出るだらうとは思つて居た。竈に火は燃えてゐる。菓子箱の上に錢が散らばつて居る。線香は呑氣に燻ぶつてゐる。どうせ出るには極まつてゐる。しかし、自分の店を明放しても苦にならないと見える所が、少し都とは違つてゐる。返事がないのに床几に腰をかけて、いつまでも待つてるのも少し二十世紀とは受取れない。

「お婆さん、此所を一寸借りたよ。」

「はい、是は一向存じませんで。」

「大分降つたね。」

「生憎な御天氣で、嘸お困りで御座んしよ。おゝ〳〵大分お濡れなさつた。今火を焚いて乾かして上げましよ。」

「そこを、もう少し燃やし附けてくれゝば、あたりながら乾かすよ。どうも少し休んだら寒くなつた。」

「へえ、只今焚いて上げます。まあお茶を一つ。」

と、立上がりながら、しつ〳〵と二聲で鷄を追下げる。こゝゝゝと驅出した夫婦は、焦茶色の疊から、駄菓子箱の中を踏みつけて、往來へ飛出す。雄の方が逃げるとき駄菓子の上へ糞を垂れた。

「まあ一つ。」と、婆さんはいつの間にか、刳抜きの盆の上に茶碗をのせて出す。茶の色の黑く焦げてゐる底に、一筆がきの梅の花が三輪無雜作に燒附けられてゐる。

「御菓子を。」と、今度は鶏の踏みつけた胡麻ねぢと微塵棒を持つてくる。糞はどこぞに着いて居らぬかと眺めて見たが、それは箱のなかに取殘されてゐた。

婆さんは袖無の上から、襷をかけて、竈の前へうづくまる。余は懐から寫生帖を取出して、婆さんの横顔を寫しながら、話をしかける。

「閑靜でいゝね。」

「へえ、御覽の通りの山里で。」

「鶯は鳴くかね。」

「えゝ毎日の様に鳴きます。此の邊は夏も鳴きます。」

「聞きたいな。ちつとも聞こえないとなほ聞きたい。」

「生憎今日は――先刻の雨で何處ぞへ逃げました。」

折から、竈のうちが、ぱち〳〵と鳴つて、赤い火が颯と風を起こし

て一尺あまり吹出す。

「さあ、御あたり。嘸お寒かろ。」といふ。軒端を見ると青い烟が、突當つて崩れながらに、微かな痕をまだ板庇にからんでゐる。

「あゝ、好い心持だ。お蔭で生返つた。」

「いゝ具合に雨も晴れました。そら天狗巖が見え出しました。」

逡巡として曇り勝ちなる春の空を、もどかしと許りに吹拂ふ山嵐の、思ひ切りよく通り拔けた前山の一角は、未練もなく晴盡くして、老嫗の指さす方に巉屹と、あら削りの柱の如く聳えるのが天狗巖ださうだ。次にまた、先刻の鶏を靜かに寫生して居ると、忽ち落附いた耳の底へ、ぢやらん〳〵といふ馬の鈴が聞こえ出した。此の聲が、おのづと拍子をとつて、頭の中に一種の調子が出來る。眠りながら、夢に隣の臼の音に誘はれる様な心持である。余は鶏の寫生をやめて同じページの端に、

春風や惟*然が耳に馬の鈴

と書いて見た。山を登つてから、馬には五六匹逢つた。逢つた五六匹は皆腹掛をかけて、鈴を鳴らしてゐる。今の世の馬とは思はれない。

やがて、長閑な馬子唄が、春に更けた空山一路の夢を破る。憐れの底に氣樂な響がこもつて、どう考へても畫にかいた聲だ。

馬子唄の鈴*鹿越ゆるや春の雨

と今度は、斜に書附けたが、書いて見て、是は自分の句でないと氣が附いた。

『又誰ぞ來ました。』と婆さんが半ば獨言の樣にいふ。

只一條の春の路だから、行くも歸るも皆近附と見える。最前逢うた五六匹のぢやらん〳〵も、悉く此の婆さんの腹の中で、又誰ぞ來たと思はれては山を登つたのだらう。路

寂寞と古今の春を貫いて、花を厭へば足を着くるに地なき小村に、婆さんは幾年の昔から、ぢやらん〳〵を數へ盡くして、今日の白頭に至つたのだらう。

馬子唄や白髮も染めで暮るゝ春

と次のページへ認めたが、是では自分の感じをいひ終せない、もう少し工夫のありさうなものだと、鉛筆の先を見詰めながら考へた。

『はい、今日は。』と、その中に實物の馬子が、店先に留まつて大きな聲をかける。

『お婆さん、那*古井へは一筋道だね。』と十錢銀貨を一枚、床几の上へかちりと投出して立上がる。

『長良の五輪塔から右へ御下りなさると、六丁程の近道になります。路はわるいが、御若い方には其の方がよろしかろ。――是は多分に御茶代を――氣を附けて御越しなされ。』

（草枕ノ一節）

―夏目漱石―

註—惟然。美濃の俳人で、姓は廣瀬といつた。松尾芭蕉の門人で、寶永七年に死んだ。
鈴鹿。伊勢と近江との間の峠を鈴鹿峠といふ。
那古井。この一文は小説中の一節で、假作の地名にすぎない。

一八　白樺の湯

三十番の茶屋を出ると、外はかつと灼きつくやうに暑い。これから峰を越え牧場を越すのであるが、その牧場には性の悪い牛が居て、時々人にかゝつて來るから、殊に、鐵の輪を篏めた牡牛には氣をつけるやうにと、茶屋の女が言つてくれたことが氣にかゝる。

目の前にそゝり立つ湯の丸山の肩に浮かんでゐる一むらの雲も、氣のせいか、大きな角があるやうに見える。

その雲を仰ぎ、さら〳〵と鳴る谷水の音に耳をすましながら、彼は唯ひとり眞夏の山道を登つていつた。ところ〴〵に險しい巖

壁が行手を遮つては居るが、谿を渡り岨を辿つてゆくにつれて、大自然は刻々とその畫面を替へ、小鳥の聲も谺をかへして、次第に山氣が霎然と迫つて來る。

谿を離れて道が林の中に入ると、更に幽寂な氣がしみ渡つて來る。總べての物が熟睡に陷つて居るやうで、しと〳〵と柔かい自分の足音も、さながら幽かな鼻息のやうである。無心で、うつとりと、唯ひとり歩を移すと、自分の魂の在りかさへも朧めいて來る。葉が零ちてゐる。石が轉んでゐる。水がしみ出して居る。切れ草鞋が横たはつてゐる。苔の上に尺取蟲が凍死でもしたやうにぢつとしてゐる。この靜寂の中にたつては、自然の魂の奥の如何なるさゝやきも、其の儘明きらかに聽きとれさうである。

突然、頭の上で牛の吼える聲が響いた。詩の夢は裂けるやうに破れた。道もいつしか木立を出て、日はかん〳〵と頭窩までも照

りつけて、草いきれはむつと噎せるやうである。時々蟻の塔の臭ひに、ぷんと鼻をつかれると、ぼうつと耳が遠くなつたやうになる。

峠の巓へ登りつめると、東西に走る一帶の峰續きを境として、大なる半圓の景が新たにぱつと眼下に展開された。而も背面に負ふ半圓の景と、前面に瞰る半圓の景とは、全くその趣を異にしてゐる。谿や、木立や、峽や、丘や、參差濃淡あらゆる變化を示して居る背後の景に比べると、前面の色どりは頗る單一で、全幅深綠のスロープである。其のスロープの盡きる彼方に、黑い巨人のやうな脊を見せて、夏の大空へ煙を吐いてゐるのは――淺間山である。彼はそこにつゝ立つたまゝ、

「牧場だ！」思はず聲を發した。峰續きにずつと長く引かれて見えるのは其の圍ひの埒であらう。遙かの彼方に小さく點々と黑痕のやうに見えるのは、放たれた牛の群であらう。唯一線此の

綠の大幅を裂いて左へ白樺の谿が走つてゐる。その谿の底に仄白く――湯の村は鳥の糞のやうに遠く小さく見えてゐる。―林久男―

註―三十番の茶屋。長野縣の禰津村の新張（にはり）から群馬縣の吾嬬村鹿澤溫泉の間に、一番より百番に至る迄の石觀音が立てられてある。その三十番目にある茶屋をいふ。

湯の丸山。淺間山の西方に聳えてゐる山。

一九　超人の境

平地から山上に移ると、吾人の氣分は一轉して別世界に入つたかの感じがする。これ一は、吾人の生存感覺に變化を生ずるが爲である。山上に於いては氣壓・溫度の低下、及び空氣の純潔の爲、肺臟及び皮膚の作用が急に彈力性を增し、それ等の變化に基いて有機感覺が著しく變化し、概して感じが輕快になり、羽化登仙など形容されてゐる氣分を生じ、體的生存の狀が、平地にある時と大いに

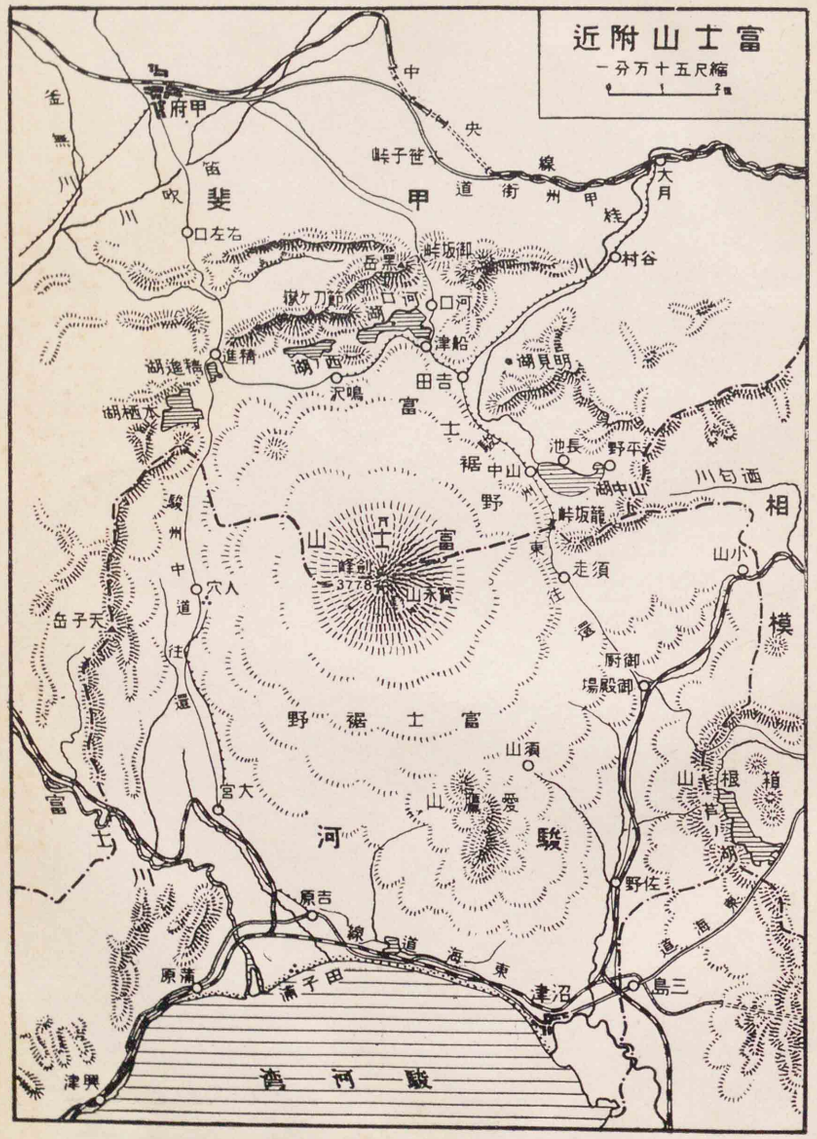
相違する。而して又一方に、山上に於いては、吾人の聽覺及び視覺に訴ふる所が、平地上に於ける所と大いに異るが爲、更に山をして靈ならしめる。

吾人は雜然とした噪音を耳にする限り、俗世界にあるとの感を離れる事が出來ない。然るに、高山に登ると、平地上に於いて聞き慣れた如き物音は、一切聽こえなくなる。音響の滅却は、吾人をして超人間たらしめる。鳥獸の聲、風雨の響の如きも、山上に於いて聽く時は、雜音の充滿ちた地上に於いてこれを聽くと、全く趣が異つてゐる。深山の夜は所謂天狗の奏樂や、湖水の忍び泣きなどといふ異樣の音をきく。しかし、鳥獸、風雨に限らず、苟も物音をきく間は、吾人はなほ、俗界を離れることが出來ない。何等の物音なくして、山上の風光を觀るに於いて、山は愈、靈なるものとなる。

視覺に映ずる山の景色が、一種の別世界をなすは、一の視線の角

度が平地に於いて、景色を眺める時と著しく相違するに基く。平地の風景は、重に眼と同水平に上下し開展してゐる。即ち、吾人は重に風景の水平相を眺めてゐるが、山上に在つては、吾人の眼に映ずる風景は、重に仰望相となり、或は俯瞰相となり、景物の配置や形狀が平地に於いて見る所と異り、全體の景色が異相を呈し、何となく不思議に感ぜられる。近來畫家中に風景の俯瞰相を描き、或は仰望相を描く者が漸次に多くなり、又西洋の立體畫家の如きは、景物の三相を同時に描き、時には逆轉相をも加へて描かんとしてゐる。これ等の畫面が新奇に見えるのは、山上の風光が別世界觀を有するのと同じ理によるのである。飛行機上から觀た風景の珍奇は、極端な俯瞰相を見るによつてである。

—松本亦太郎—



二〇　富士裾野の村

熔岩の崩れの富士の裾は、實に廣漠たる眺めである。駿河おもての所謂御厨在を旅する人は、黑褐色の燒砂の道や、雪しろ川のから床の外は、たゞ一面の茅野で、偶に灌木の林がちよぼ〳〵と、くすねて生えてゐるのを見るばかりであらう。雨の日などに獨りで通る時は、淋しい、見棄てられたやうな曠野の感じが、犇々と迫つて來る。けれども、さすが表だけに、南だけに、常には明かるい、開いた、大まかな、ゆとりのある心持を與へてくれる。

さて、試みに須走から、春初めならば雪解の水の河をなす細長い無名谷を渡つて、登り一里の籠坂峠を越して見給へ。誰も知つてる通り、峠から北は甲州路で、天地は全然一變する。脉々たる連山は富士に迫つて裾野を取卷いて、黑木林や落葉林の間に、山中・明見・

川口・西・精進・本栖の湖水が散在して、――とはいへ、其れ等が此の峠から悉く見える譯ではない。――其の白く輝く水と、黑く集まる山々との對照が、妙に暗い、深い、閉ぢこめられたやうな感じを惹起こす。それでも同じ裾野は裾野である。峠を下れば、やはり燒原の茅野、萩原で、眺めた時の一跨ぎも、歩いてみれば十里二十里、もし疲れた時には振返つて見給へ。富士は一萬二千三百七十尺、群小の麓ぎ合ふ地を拔いて、赤裸の肌を風雲に暴露する其の姿の神々しさ、近く山なき御厨邊で見る事のならぬ有樣だ。のみならず、夏ならば湖畔の濕地に咲く草花の色々、――此の邊は春よりは、夏から秋へかけて花が多い。わけても萩は美しい。――秋ならば、時雨が早く、霜も早く、木立の黃葉し紅葉する樣は、淋しいながら見事である。落葉樹では楢・栗を最もとして欅や山毛欅や楓や榛の木が多く、常磐木では、松・杉・檜は無論の事、俗に黑木といつて樅や栂や椹が

多い。平地、沼地は大分切開かれ、耕されて、田となり畑となつたが、谷間から山奥、山の頂は、多くは斧鉞の入るを許さぬ御料林で、蓁々と晝も小暗く茂つてゐる。

籠坂を越して遠く北に通ずる街道が、所謂駿州東往還で、自分の村の川口は、此の街道を挾んで、上下三里の御坂峠の峻坂を背負ひ、東に三峰山、西に城ケ岳、十二ケ岳、蘆原山、南に川口湖を隔てて富士に對する小村である。

二百戸そこ〳〵の裾野の村！まあ想像しても見給へ。隣家へ二町三町の木曾の山中程ではなくとも、隣村へは何方へ出ても、一里か二里はある。それはさゝやかながら、學校もある役場もあるが、儲からぬとて藪醫者さへ住附かぬ程の寒村で、湖水を越しての醫者迎へ、醫者殿の御座る頃には病人は二時間も前に死んでゐたといふ例が數知れない。自分は病後の母に飲まさうと、村中探し

ても葡萄酒一滴なく、雪の朝を二里餘買ひに行つた事を覺えてゐる。だが、中央東線の鐵道のまだ笹子を拔かぬずつと以前、自分の子供の時分には、湖水は舟で、峠は駕籠のお客の往來もあつたので、舟唄、馬士唄、駕籠舁唄、か程の片田舎でも、晝間はさう淋しくも無かつた。

其の頃はまた、山中の驛から湖畔づたひに、荷物、多くは魚荷の通し馬もあつて、山中女と通稱の女馬士が、男勝りの聲を揚げて、ヂヤリンヂヤリンと鈴の鳴る、歸りの駄馬に横乘りしては、

「富士の裾野の茅野の中で……。」

といふ風の追分を歌つて過ぎて行く、その肥太つた胸をはだけた樣は見好くもないが、若い女が多いので、十字の襷や笠の紐は、薄桃色か、水淺黄、さすがに風雅にも思はれた。

村はづれの並木で、村の若者が、御料林の盜伐——とはいへ自然

に生えたものを、丸太に切らうが角に挽かうが、かまつたことではないといふ調子の濫伐――をした歸りを、暖を取らうと背負子を卸しては、落葉や枯枝をかき集めて焚火をし、山から採つて來た菌をあぶつたり、栗を燒いたりして、罪のない話をしてゐる。白い煙がする〳〵と木立をのして、黑木の葉の茂みに紛れ入る下で、赤い火影に額をほてらせて、折々どつと笑聲がする。

まだいたいけの十歳前後の子が、拾ひ集めて來た柴を背負つたまゝ、大人の間に足をなげ出して居ると、

「やい、燃木を拾つて來にや仲間に入れないぞ。」

と揶揄はれるを眞に受けて、背負子の肩を脫いで立上がり、夕闇の中を探り廻つて、

「ほうら、これでえゝか？」

と皆の機嫌を伺ひながら、一束抱へて來たのを投込んで、ぱつと

燃立つかげへ蹲り、小さな手をもみ〳〵あたり込む。

「なあんだ、早、燃いちまつたぢやないか、武公お前のもや(柴)を皆ぶつ燒べろ。」

「いやだあ……よせやあ、束がほどけるぢやないか、ふむ、そないの事しちや困らあ。」

と鼻聲になると、

「よせ〳〵。」と誰か大人が止める。

「武公、汝の荷を今日は俺が半分手傳つて拾つてくれただから、おとつさんにさう言へよ、今度市場へ行つたらおさぼを一匹買つて來て、俺に禮に寄越すやうにつて。」

「おさぼつて何だあ……矢張鯖の事か。」

「アハヽヽ、アハヽヽ、ワツハツヽヽヽヽ。」

―中村星湖―

註―御厨。駿河國駿東郡に在る町で、御殿場のあるあたり。

雪しろ川。御厨在を流れてゐてつねは水のない小川。
須走。須走村といふ。御殿場の西北三里、富士登山東口の村。
籠坂峠。須走の北一里。駿河甲斐の州界である。
笹子。甲府盆地の東端にあたる笹子峠を貫通する有名な長いトンネルをさす。
そないの事。そんな事と云ふ意の方言。

三　湖畔を廻りて

荒涼たる富士山麓を、吉田から、赤錆の磨滅した十二封度のレールの上を曳きずられた私の小さな汚れた電車は、コトリと音をたてて終點山中村でとまつた。

五六人の人と私は電車から降りた。三月はじめの午後三時頃の曇天に富士は深くも悪まれて、僅に麓の森林帶の雪がところまだらに、陰影と光とを作つて居る。そして、富士颪が飄々と空から吹きおろしてゐる山中村の往還を、五六人の人影が黒く吹きとば

されて、忽ちのうちにどこかへ姿を匿してしまつた。

私は、これから夜どほしでも、湖畔を歩いて、酒匂川水源地帶の大棚山林まで行かねばならんのであつた。然し、そこまでは少なくも五里以上はあるのだ、それに道は不案内である。どうしても、案内者を頼む必要に迫られてゐた。で、とある百姓家の土間に私は這入つた。そして、それから平野といふ對岸の寒村まで馬を雇つた。圍爐裡ばたに、ふかり〳〵煙草をふかして、大縞のねんねこを着ぶくれてゐた赭ら顔の、いかにも荒村の野士を思はせる老爺は、なか〳〵に快諾してくれなかつたが、私はすた〳〵厩の方へ歩いて行つて馬棚から顔を出してゐる二頭のうちの、黒毛の雌馬を選んで、嫌應なしに、その背に鞍を置かせてしまつた。

「おおい、金公や、この旦那を平野迄送つて來いよ。」

と納屋の方に向かつて、老爺は大きな聲で呼ばつた。

金公は十四五歳の、みづのきの梢のやうに紅い顔をした少年だつた。手も寒いためか紅く、そしてぴし〳〵とはねさうな元氣をその圓い光つた眼にあらはしてゐる。

「よし、君頼むよ。」と私は、積藁を足臺にして、馬の背に跨つた。馬は知らぬ人間をのせた不安さに、おほきく胴ぶるひをした。

私達はかくして出かけた。

厩のうしろの防風林をつきぬけて行く。冷たい冬青の葉が私の顔にあたる。眼をあいて見ると、そこには灰色の平野が茫としてあらはれて居た。——と思つたのは、それは凍れる山中湖の平面圖であつた。

斑々たる荒蕪地と、一面に素枯れた草原と、二三の村落の點在と、梢を磨光らせた濶葉林の一部とに取りかこまれた富士山麓の蝦の形をした山中湖は、たゞ一いろの灰色に凍つてゐる。

私は馬上からはろ〴〵と沖の方を見渡した。

灰色の湖面にひとところ何か、青くうね〳〵と、盛りあがり〳〵してゐる。私の視野がその一點に局限せられたとき、それは波のうねりであることがわかつた。富士颪に吹きさらされて、湖のまなかに青波があがつてゐるのだ。

私は馬の背で、手を擧げて思はず「おおい、沖に波があがつてゐる。」と叫んだ。

さきに手綱を曳いてゐた少年は振返つて、私の顔をみて、笑つた。彼の笑顔は野菜のやうに新鮮で素朴であつた。

馬は、湖岸の雪を踏んで行つた。蹄の音が體にこゝろよくひゞいた。

少し行くと、岸に打込んだ杭に長い綱が結へてある。その綱を辿つて湖の方をみると、灰色の氷原の向かふの青い波の上に、船が

一艘漂つてゐる。みてゐると、船は時折低く垂下ろした曇天に向かつて突きあげられる。かと思ふと、青波の向かふにふと姿をかくす。その都度、岸の杭の綱が、ちぎれるばかりに渚の雪を磨つて、張つたりゆるんだりする。

黒い水禽が一羽、鋭く啼いて私の頭の上をすぎる。

私は寒いので頭からすつぽりと白い毛布をかぶつて、ゆらりゆらりと馬に搖られて行く。

一面に崩壞した土砂原の下を、私と私の馬と少年とは、默つて行く。路傍の日かげには、雪が白く消殘つて、紅い灌木の梢が頭を出してゐる。

蒿雀がどこかで啼いてゐるなと思ひながら、私は寂しくなつて、少年に話しかける。少年は「へい」とか「そうでない」とか、簡單な返辭ばかりしてゐる。

路の左側に、光つた濶葉樹林があらはれて來た。巨大な欅が白い幹を何本となく直立させてゐる。と思ふと、その下に青い野菜畑を見出して、私は驚いた。村落があるのだと思つた。二三軒の戸をたてた家がやがて木の間にその屋根をあらはしてゐた。

あたりは閑寂としてゐる。

地圖を出して見ると、點々と黒い點線は長池*といふ部落であることを示してゐる。人の棲んで居さうな氣配がしないが、野菜畑のあることを思へば、それは否定出來ない。「こゝの村には人が冬でも棲んでゐるのか。」と、少年に問ふと、たゞ「ゐる。」と、答は頗る簡單である。

その少年の簡單な返辭を裏書するやうに、向かふの木の間から一人の人が來た。蓬々と風に吹かせた灰色の頭髪が、枯草のやうに光つてゐるのが、私の眼にはつきりと映つた。手に小鳥籠をさ

げてゐる一人の老爺であることが、野菜畑のそばに來たときに、私をしてなつかしさといふよりは、一種の驚異に似た感動によつて、馬の歩みをとゞめさせた。老爺の姿は、あたりの荒涼した風景に、まことにふさはしくさへ思はれた。灰色の空雲と、地上の雪と、凍れる湖と、白く風に吹洒された冬木立と、ところ〴〵雪の下からあられた枯草と、これらもろ〳〵の風景のなかに點出された、自然の一部としか、それは思はれぬ程であつた。

然し、彼の老爺の後から一羽の家鴨が、寂しい低音で體の調子をとりながら、歩いて來るのを見たとき、私は生けるものの歡びを感じた。

老爺は傍の木の枝にその小鳥籠を吊るした。

鳥籠には鳥がゐないやうであつた。と思ふと、薄い影がちらちらと動くのみが見えるやうでもあつた。

老爺は、木の枝に鳥籠――それはどう見なほしても、四五十間離れた距離からは鳥がゐるやうには見えぬ。――をかけると、そのまま木の幹のやうな脊をみせて、枯木立のなかの、まだらに雪をのせてゐる屋根の方へ、遠ざかつて行つた。家鴨もまた、寂しい影を雪におとして、老爺のあとに從つた。

私は、冬の姿をしみ〴〵と見たやうな氣持であつた。然し、私の馬も少年も、たゞ道を急いでゐた。少年の持つてゐる手綱はたるんで雪をすつた。

私は馬の背の上で、しきりに寒さを感じた。まして、さつきの老爺の影のやうな姿を見てから、一層寒くなつたやうだ。私は焚火を思つた。この雪原であか〳〵と燃える焚火を思つた。で、とう馬から私は降りて、少年と二人で湖岸の落葉林に入つて枯木をあさつた。枯れてゐると思つて折る山毛欅（ぶな）や犬しでの枝は、水

のやうな香氣を散らした。私はその生木の香を嗅ぎながら、ふと忘れてゐたポケツトの葉卷煙草のことを思ひ起こした。

「さう〳〵、すつかり忘れてゐた。」と片手を外套のポケツトのなかに挿入れて、その袋に指さきを觸れてみた。

少年は林の奥に行つて、杉の枯葉や枯枝を、一かゝへも拾ひ集めて來た。私達は、早速に雪をかきよせて、それらの燃料をつみあげて、マツチをすつた。濕つた杉葉は唯烟るばかりで、なか〳〵に火を點じなかつたが、それでもマツチを十本ほど無駄にする頃には、青い焰をあげはじめた。みる〳〵うちに風に煽られて、さつと赤く燃えあがつた。

私も少年も火に手をかざした。雪の中の焚火は、烟りながらも程もなく盛んに燃えあがつて、私達のからだをあたゝめてくれた。少し離れてゐた馬までが、焚火の方へ少し恐る〳〵といふやうに

寄つて來た。

私は煙草を端の端まで吸ひつくした。

少年は、ふところから赤いふかし甘藷を取出して、火のなかに投込んだ。

「君は幾歳か。」

「十四。」

「學校は……。」

「今六年だ。」

「學校を卒業したら何になる。」

「百姓だ。」と、彼は直ちに答へた。

「さうか、百姓になるか。」と私は何といふことなしにある感動を、少年のきつぱりした自信のある返辭から受取つた。

「俺はよい百姓になるぜ。俺は開墾をやるつもりだよ。」

「ほう、開墾を……？」

「湖を開墾して稻を作るつもりだ。學校を卒業する今月の末には雪が消えるから、すぐに村の人と始めるよ。」

と、彼は遙々と村の方を見渡して、青い稻田を想像してゐるやうな眸をした。この湖畔は殆ど火山灰の瘦地で、今まで米はとれなかつた。で、村の人々は玉蜀黍や甘藷を常食にしてゐるといふ。それを、今度この少年は新たに湖畔を開墾して稻を作るのだといふ。私は少年の抱負と空想とに羨望に近い同情を抱かされて、また馬に跨つた。

日が今にとつぷりと暮れかゝつて來さうなので、馬を少しく急がせる。

私は馬上から、さらに幾度となく凍つた湖を展望した。そして、少年の空想がいつか實現される日のあることを思つた。

湖の沖には、いつまでも〳〵、たゞうね〳〵と音のない青黑い波が、垂れさがつた曇天の下でうねつてゐる。

路は、固い寢雪の一本路である。その一本路は、時折、湖岸を少しはなれては山毛欅の木立のなかに入り、灌木原に出で土橋を渡り、一うねりしてまた湖畔に出でては、溝の雪のなかに凍てついた沼芹の青さに示唆されて、更にその行手を私達の前にはる〴〵とあらはしてくる。

私達はとかくして三里の路を行暮れて、平野といふ村に着いた。

私は、村の馬の立場に行つて提灯を一つ借り、案内人を更に一人頼んだ。そして、はる〴〵と又三里の路を山中村に歸る少年と、村はづれで別かれた。別かれる時も、私の提灯の灯を少年の提灯にうつして、銀貨を幾枚か餘分に少年の紅い冷たい掌の上においた。

少時して振りかへると、徒歩で馬のさきに立つて行く少年の姿

が、黑く夕闇をとほしておぼろにみえる。

私は、つと感涙をおぼえて、眼がしらが熱くなるのを感じた。彼は馬をいたはつて、三里の路を徒歩で歸るのだ。しかも、此の暮夜の寂しい湖畔の一本路を、――と思ふと、私は感謝に似た心さへ湧いた。少年の提げてゐる提灯があかく遙かに、木の間がくれに見られた。私は案内者のあとから、すた〳〵と足音をたてながら、大棚山林の伐採事務所に急いだ。

平野の村を出はづれると、全く夜になつた。草山の峠を一つ越えると、風はぱつたりと落ちて、遽にぽつとした溫かみが顏に感じられた。雪はいつしか消えて山路は、泥深く草鞋を沒した。

「岬の向かふと此方とはえらく陽氣がちがひます。」

と若い案内人は說明してくれた。

暗い足もとでは、ちろ〳〵と水の流れる音がしてゐた。あたゝ

かい雨さへこぼれて來た。用意して來た二本の番傘を一本づゝわけてさした。

はら〳〵と傘にあたる木の枝は濡れて、提灯のあかりに光つてみえた。路は、全く森林地帶に入つてゐることを、おのづから知つた。

二時間後、夜ふけて私達は、黑い原生林のなかの伐採事務所に辿りついたのである。　―前田夕暮―

註―**吉田**。甲斐國に在る富士登山北口である。

山中。甲斐國にある小村で、甲府から十二里半。山中湖を通つて酒匂川上流に出る地點。

酒匂川。相模國に在る川で、富士山の東麓に源を發し、小田原の北東三十町の地で海に入る。

平野。山中と共に中野村の字である。

長池。山中湖の北岸にあたる。

三　富士山へ登る

いちじるしく大きく見ゆる富士の下に自動車を下り
現し身ひくし
面むけて上りつゞけゐし富士山よりふりかへり見る
裾野のひろがり
七合目の夜明けの寒さ寢の足らぬ眼をしばたゝき草
鞋をはくも
夕日洩るゝ裾野木原に下り來りくたびれ歩む平たき
路を
太陽は眞上に來り眼の前に富士の頂上を明きらかに
照らす

—木下利玄—

—生みの土地・生みの人々—

三　杜の家

四百年餘も年を經た槻の木が七本立圍んでゐて、周圍は、松・杉などの古樹が飛び〳〵に取卷いて、上にある塀の壞れかゝつた芝生の土手を繞らし、其の土手の下には、細長い濠がこれに沿うて掘られてゐる。此の槻の樹の杜の中に立つてゐるのが、自*分の生まれた家である。

四月の初旬、自分は祖母の病氣を見舞ふために家に歸つた。槻の木にはまだ若芽がふかない。家の周圍の土手の上には、若草が僅に萠初めて、蒲公英の花が、彼處此處に黃に咲いてゐた。近くの山からの雪消の水に量を增した小川は、籬の外を流れ、其の川の岸

には、なほ去年の落葉が堆高く敷かれてゐる。

春先ではあるが、今でも折々、西山からの風が此の老樹の杜に打當たつて來て、其の度毎に、家も震動する樣に覺える。――家には、老祖母と、父と、伯母と、それに小さな弟がゐる許り、昔は酒造りや作男などが二三十人もゐて盛んに暮してゐた家は、今では徒らに隅隅に小暗い所が出來、終日戸も開けないやうな室が多くなつた。

ランプを二つや三つ點したとて、家の中の暗さは中々去りさうにも無い。自分が久振りで歸つたので、爐には常よりは盛んに火も燃えてゐるが、打消す事の出來ない冷たさは、何處にか潜んでゐて、火勢が一寸でも弱くなると、直ぐ四方から押寄せて、家中に漲らうとしてゐる。爐の端で、しきりに火をば燃さうとしてゐる弟は、「何故斯う燃えが悪いだらう。」と呟きながら、懸命に火を吹いてゐるが、火が燃上がると、ゆら〳〵と搖れて弟の影が後ろにながく引く

が、やがて薄くなつて、復た闇の中に含まれてしまふ。

古風の行燈の下で、久振りの一家親子の晩餐、父が日頃丹誠した野菜、伯母の育てた鷄の卵、不味からう筈はない。話は遠くに別かれてゐる妹と、もう一人の弟の事で持切つてゐた。祖母も病氣を押して、假りに皆と一所に食膳に着いたが、別に何も食するでもなかつた。唯、折々寂しい笑を洩らして、話を聞いて居られるばかり、父は久振りで、樂しく醉つたと言つて、連りに青年時代の活動を說く。「兎角、若い時には、何事にでも眼前の事柄に、全力を擧げて打當たつて見よう〳〵とするものさ。」と、自己が衆議院議員の候補者として、連夜徹宵して演說などした事をば話して聞かせる。

樂しい晩餐は終はつた。祖母は病室へ退かれる。伯母と父は祖母を抱へるやうにして送つて行つた。自分は一人で屋外へ出て見た。

薄月の光は、枯木の枝を通して射して來る。見上げると、七本の槻の樹は、互に其の怪腕を伸ばし合つて、縱横無盡に入亂れてゐる。そして、其の枝の伸びゆくのを遮ぎる何物でもあれば、突退け押破らずば息まないといふやうな勢を示してゐる。一度、此の怪腕の觸れる所、何物か碎けずに居るものがあらう。

薄月の影は微かに地に落ちて、盤錯してゐる老槻の根の上に、自分の影を投げる。顧みて其の影を見ると、何といふ慨然な、憐むべき姿ぞ、今にも嵐が杜に打當たつて來たらば、直ちに吹かれて何處かへ飛ばされてしまふに違ひない。否、今にも樹の根が裂けて、自分の身をば呑込んでしまひはしないかと、思はず身を振るはせてとびのいた。

樹と樹との間に、鬼の蹲つてゐるやうに巖乘（がんじよう）に建てられてゐる其の家の影は、眞黑い一團となつて見えてゐるが、それが何か巨大

な動物の遺骸か何かのやうに思はれて、自分等は今其の遺骸の中に葬られてゐるのかと思ふと、身内に一層戰慄を覺えて來た。

樹の下を拔けて、田の間の暇途へ出ると、寒いながらに春の月は微茫として、田を四五枚隔ててての向かひの丘に、松の林が夢のやうに横たはつてゐる。そして、丘の麓に燈が二つ素絹を透した珠のやうに見えてゐる。寂しい中に言ひ難い懷しさがあつて、其の燈火は瞬き〳〵して、何か告げるやうに思はれる。

振返つて見ると、森の影、家の影が、眞黑く、周圍を壓するやうに夜霧の中に立つてゐる。あの黑い影の中に、老祖母が病み臥してゐるかと思ふと、復た堪らずなつて、杜の中へ引付けられるやうに驅込んで來た。

祖母は、自分が歸つたので、幾分氣に緩みが出來たのか、其の夜は常よりは惱みも少なく眠られるやうだと、祖母の枕頭で伯母は小

聲で自分の耳に告げた。

其の夜は疲れたので、自分も祖母の傍に眠つてしまつた。

—吉江喬松—

註—自分の生まれた家。作者の郷里は長野縣諏訪在である。

二四　父の記憶

私はやつと自分の足で、よち〳〵と家の疊の上を歩き始めた時分に父に死に別かれた。それは何でも廣い〳〵疊の部屋に於いてであつた。と、言つても私の背の高さが三尺に滿たなくて、歩く足と足との幅が短かつたから、割合に小さな部屋でも隨分廣く見えたのかも知れない。その部屋のまん中に、私の父が如何にも大病人らしく、厚い、大きな布團の中に寢てゐた。その光景は如何に

も大ぎやうで、物々しく見えた。だが、それは、私の一生をかなり不幸にしたところの父の死の床であるとは、そんな小さな私に分かる筈がなかつた。天井から氷嚢が吊つてあつた。そしてその下に父が眼鏡をかけて、仰向けになつて寢てゐた。唯、それだけの光景である。それだけの光景を、私ははつきり覺えてゐる。

年月といふものは、人の身の上に起こつたどんな身を切るやうな悲しみも、どんな心をとろかすやうな喜びをも、恰も、他人の事か、或は寫眞か畫の上の事かのやうな餘裕を彼に與へるものである。それは一つの川に譬へてもいゝ。その年月が隔たれば隔たる程、その川の廣さは增して來る。我々の身の上に起こつた過去の喜びや悲しみと、今の我々との間に、卽ちその年月の川が流れてゐるのである。嘗てあんなに身を焦したやうな思も、嘗てあんなに煩悶した事柄も、その川を隔てて眺める時は、其の苦が強かつた程、川

を隔てた眺めは面白い、――と言つて、もとよりこれは今に始まつた考へではなく、誰も經驗するところであらう。

さて、私の父の死の床の記憶は、今からざつと三十年も前のことである。後で人に聞いて見ると、彼が死んだのは私の數へ年四歳の年の三月二十日のことであつた。私は七月生まれであるから、その時、私は生まれて滿二年と八九ケ月の頃だつたに違ひない。私の父は或日、突然腦充血を起こして、十日程床に就いてゐて、そして死んだのである。私はその時の廣い、そして片附けられた座敷と、天井から吊るされた氷嚢と、物々しい寢床と、眼鏡をかけた父の顏と、そして不思議なことに、そこへよち〳〵と一人で危ふげな足取をして歩いて行つた私自身の姿とを覺えてゐる。私は小綺麗な着物を着せられてゐた。そして、羽二重の袖無しのちやん〳〵こを着てゐた。その位の年頃の子供を指して、人は頑是がないと

いふが、實際私は頑是がなかつた。何故といつて、私はその時の私の氣持を覺えてゐる。私は殆ど、その時何の心配をもしてゐなかつた。だが言はば、幾分かいつもとは違つた、變に啻ならぬ光景を少うし感じてゐたやうではあつた。だが、そこに寢てゐる人が、死にさうだといふ事も、ましてその人が死んだら大變だと言ふことも、何にも考へてゐなかつた。そして唯、その眼鏡をかけて仰向きに寢てゐる人の傍に、よち〳〵と歩いて行つたのである。それが自分の父だといふ意識も、それは無論なくはなかつたが、ごく僅かだつた事を覺えてゐる。それから、そこへ乳母が現はれたのか、看護婦または母が現はれて來たのか、そして彼等が私を抱いて外の部屋に連去つたのか、そこは全く私の記憶にない。唯、かうして書いてゐると、何だか、さうして眼鏡をかけて寢てゐた父が、私の顏を見て何か物を言ひさうにしたこと、そして言はなかつたこと、それ

も病が重くて言ひ得なかつたのであらう、その顔が、妙に悲しさうに見えたことを思ひ出すが、もつともこれは私が今記憶に呼起こして、そしてその後、結び付けたおまけの考へかも知れない。

だが、私の記憶が間違つてゐないことは、私がこの時小綺麗な裝をしてゐて、羽二重の袖無しを着てゐた、といふことを母にその後話した時、彼の女は驚いてゐた。そして色々の人が見舞に來るので、その時私の着物を着更へさせてあつた事、それから羽二重の袖無しのちやん〳〵こは、その年の正月に誰とかさんから貰つたもので、多分それを着せてあつたのだらう。私でさへよく覺えてゐないが、さう言へばきつとそれを着せてあつたのだらうと、彼の女の言つてたことだ。又、父がそんな病床にありながら、眼鏡をかけてゐた事は、それも明きらかな事實で、彼は決して、風呂に這入る時でも、寢床に這入る時でも、眼鏡を外さなかつたさうである。これ

は不思議なもので、彼の子である私も、大人になつて眼鏡をかけるやうになつた私も、今、同じ癖をもつてゐる。

そんな風に、私は早く父に別かれたものだから、ひどく父が戀しかつた。だが、それを口に出して言ふと、きつと涙が出るだらうと思つたから、私は默つて始終さう思つてゐた。どうしたら、彼の顔を見られるだらう、と色々と思ひなやました。寫眞だけでは、どうも物足りないのである。お父さんの顔をいつも見られてゐる子供たちは仕合はせだと思つた。でなくても、せめてもう少しはつきりと思ひ出せる位に迄、私が大きくなつてから、彼が死んでくれたらよかつたのにと私は思つた。何しろ私が彼に就いて何の記憶を作る能力のないうちに、彼は私から、そしてこの世から、消えて行つてしまつたのである。

—宇野浩二—

二五　お母さん

八歳か九歳の時か、兎に角どちらかの秋である。陸軍大將の川島は回向院の濡れ佛の石壇の前に佇みながら、味方の軍隊を檢閲した。尤も軍隊とはいふものの、味方は保吉ともで四人しかゐない。それも金釦の制服を着た保吉一人を例外に、あとは悉く紺飛白や盲縞や筒袖を着てゐるのである。

これは勿論、國技館の影の境内に落ちる回向院ではない。まだ野分の朝などには、鼠小僧の墓のあたりにも銀杏落葉の山の出來る二昔前の回向院である。妙に鄙びた當時の景色――江戸といふよりも、江戸のはづれの本町といふ當時の景色は、とうの昔に消え去つてしまつた。しかし唯、鳩だけは同じことである。いや、鳩も違つてゐるかも知れない。その日も濡れ佛の石壇のまはりは

殆ど、鳩で一ぱいだつた。が、どの鳩も今日のやうに小綺麗に見えはしなかつたらしい。「門前の土鳩を友や樒賣り」――かういふ天保の俳人の作は、必ずしも回向院の樒賣りをうたつたものとは限らないであらう。それでも、保吉はこの句さへ見れば、いつも濡れ佛の石壇のまはりにごみ〳〵群らがつてゐた鳩を――喉の奥にこもる聲に薄日の光を震はせてゐた鳩を思ひ出さずには居られないのである。

鑢屋の子の川島は、悠々と檢閲を終はつた後、盲縞の懐からナイフだのパチンコだのゴム鞠だのと一しよに一束の畫札を取出した。これは、駄菓子屋に賣つてゐる行軍將棋の畫札である。川島は、彼等に一枚づゝその畫札を渡しながら、四人の部下を任命した。此處にその任命を公表すれば、桶屋の子の平松は陸軍少將、巡査の子の田宮は陸軍大尉、小間物屋の子の小栗は唯の工兵、堀川保吉は

地雷火である。地雷火は悪い役ではない。唯、工兵にさへ出合はなければ、大將をも俘に出來る役である。保吉は勿論得意だつた。が、まんまろと肥つた小栗は任命の終はるか終はらないのに、工兵になる不平を訴へ出した。

「工兵ぢやつまらないなあ。よう川島さん。あたいも地雷火にしておくれよ、よう。」

「お前はいつだつて俘になるぢやないか。」

川島は眞顏にたしなめた。けれども、小栗は眞赤になりながら、少しも怯まずにいひ返した。

「嘘をついてゐらあ。この前に大將を俘にしたのだつてあたいぢやないか。」

「さうか。ぢやこの次には大尉にしてやる。」

川島はにやりと笑つたと思ふと、忽ち小栗を懷柔した。保吉は

未だにこの少年の惡智慧の鋭さに驚いてゐる。川島は小學校も終はらないうちに、熱病の爲に死んでしまつた。が、萬一死なずにゐた上、幸にも教育を受け得たとすれば、少なくとも今は年少氣鋭の市會議員か、何かになつてゐた筈である。

「開戰！」

この時、かういふ聲を擧げたのは、表門の前に陣取つたやはり四五人の敵軍である。敵軍は、今日も辯護士の子の松本を大將にしてゐるらしい。紺飛白の胸に赤シヤツを出し、髮の毛を分けた松本は、開戰の合圖をする爲か、高々と學校帽をふりまはしてゐる。

「開戰！」

畫札を握つた保吉は、川島の號令のかゝると共に、誰よりも先へ吶喊した。同時に又、靜かに群らがつてゐた鳩は、夥しい羽音を立てながら、大まはりに中ぞらへ舞上がつた。それから――それか

らは未曾有の激戰である。硝煙は見る〳〵山をなし、敵の砲彈は雨のやうに彼等のまはりへ爆發した。しかし、味方は勇敢にぢりぢり敵陣へ肉薄した。尤も、敵の地雷火は凄じい火柱をあげるが早いか、味方の少將を粉微塵にした。が、敵軍も大佐を失ひ、その次には又保吉の恐れる唯一の工兵を失つてしまつた。これを見た味方は、今までよりも一層猛烈に攻擊をつゞけた。——といふのは勿論事實ではない。唯、保吉の空想に映じた回向院の激戰の光景である。けれども彼は落葉だけ明かるい、もの寂びた境内を駈けまはりながら、あり〳〵と硝煙の匂を感じ、飛違ふ砲火の閃きを感じた。いや、或時は大地の底に爆發の機會を待つてゐる地雷火の心さへ感じたものである。かういふ潑剌とした空想は、中學校へは入つた後、いつの間にか彼を見離してしまつた。今日の彼は、戰ごつこの中に旅順港の激戰を見ないばかりではない、寧ろ、旅順

港の激戰の中にも、戰ごつこを見てゐるばかりである。しかし、追憶は幸にも少年時代へ彼を呼返した。彼はまづ何を措いても、當時の空想を再びする無上の快樂を捉へなければならぬ。

硝煙は見る〳〵山をなし、敵の砲彈は雨のやうに彼等のまはりへ爆發した。保吉はその中を、一文字に敵の大將へ飛びかゝつた。敵の大將は身をかはすと、一散に陣地へ逃げこまうとした。保吉はそれへ追ひすがつた。と思ふと、石に躓いたのか、仰向けに其處へ轉んでしまつた。同時に又、勇ましい空想も石鹼玉のやうに消えてしまつた。もう彼は、光榮に滿ちた一瞬間前の地雷火ではない。顏は一面に鼻血にまみれ、ズボンの膝は大穴のあいた、帽子も何もない少年である。彼はやつと立上がると、思はず大聲に泣きはじめた。敵味方の少年は、この騷に折角の激戰も中止したまゝ、保吉のまはりへ集まつたらしい。「やあ、負傷した。」といふもののもあ

る。「仰向けにおなりよ。」といふものもある。「おいらのせいぢやなあい。」といふものもある。が、保吉は痛みよりも名狀の出來ぬ悲しさの爲に、二の腕に顏を隱したなり、愈、懸命に泣きつゞけた。すると突然耳もとに嘲笑の聲を擧げたのは、陸軍の大將の川島である。

「やあい、お母さんつて泣いてゐやがる！」

川島の言葉は、忽ちのうちに敵味方の言葉を笑ひ聲に變じた。殊に大聲に笑ひ出したのは、地雷火になり損なつた小栗である。

「可笑しいな。お母さんて泣いてゐやがる！」

けれども保吉は泣いたにもせよ「お母さん」などといつた覺えはない。それをいつたやうに誣ひるのは、いつもの川島の意地惡である。――かう思つた彼は悲しさにも增したくやしさに一ぱいになつたまゝ、更に又震へ泣きに泣きはじめた。しかし、もう意氣地のない彼には、誰一人好意を示すものはゐない。のみならず、彼

等は口々に川島の言葉を眞似しながら、ちり〳〵に何處かへ駈出して行つた。

「やあい、お母さんつて泣いてゐやがる！」

保吉は次第に遠ざかる彼等の聲を憎み〳〵、いつか又、彼の足もとへ下りた無數の鳩にも目をやらずに、長い間啜り泣きをやめなかつた。

保吉は爾來この「お母さん」を、全然川島の發明した嘘とばかり信じてゐた。處が丁度三年以前、上海へ上陸すると同時に、東京から持越したインフルエンザの爲に、或病院へはいることになつた。熱は病院へはいつた後も、容易に彼を離れなかつた。彼は白い寢臺の上に朦朧とした眼を開いたまゝ、蒙古の春を運んで來る黃沙の凄じさを眺めたりしてゐた。すると或蒸暑い午後、小說を讀んでゐた看護婦は、突然椅子を離れると、寢臺の側へ歩み寄りながら

不思議さうに彼の顔を覗きこんだ。

「あら、お目覺めになつていらつしやるんですか。」

「どうして？」

「だつて今、お母さんつておつしやつたぢやありませんか。」

保吉はこの言葉を聞くが早いか、回向院の境内を思ひ出した。川島も或は意地の悪い嘘をついたのではなかつたかも知れない。

—芥川龍之介—

註—回向院。東京本所に在る建物。江戸明暦丁酉の火災に横死した無縁の亡魂をとむらふ爲に建てられたもので、後、刑で死んだものなどを祭葬した。境内に相撲の角技場があるので世俗に知られてゐる。

二六　私の祖母

子供の時分の事はもう大抵忘れてしまつたが、不思議なもので、

覺えてゐる事だと、判然と昨日の事のやうに想はれる事もある。中にも是ばかりは一生目の底に染附いて忘れられまいと思ふのは、十歳の時死に別かれた祖母の顔だ。

今でも目を瞑ると、直ぐ顯然と目の前に浮かぶ。面長の老人だから無論皺は寄つてゐたが、締まつた口元で、段鼻で、なか〳〵上品な面相だつた。が、眼が大きく、女には强過ぎる程の險が有つたので、古屋の——これが私の家の姓だ——隱居の眼といつたら、隨分評判の眼だつたさうだ。成程然ういへば、何か氣に入らぬ事が有つて、祖母が白眼でぢろり睨むと、子供心にも何だか無氣味だつたやうな覺えがまだ有る。

大抵の人は氣象が眼へ出ると言ふ。祖母がやはり其れだつた。全く眼色のやうな氣象で、勝氣で、鋭くて、能く何かに氣の附く、口も八丁、手も八丁といふ、一口にいへば男勝り……まあ、さういつた

質の人だつたさうな。――私は子供の事で一向夢中だつたが。生長後、親類などの話で聞くと、それといふのも幾分か境遇の然らしめた所も有つたらしい、――といふのは、早く祖父に死なれて若い時から後家をとほして來た。後家といふ者は、いつの世でも兎角人に陰口を言はれ勝の、割の惡いものだから、勝氣の祖母はこれが悔しくて堪らない。それで、何の、女でこそあれ、と氣を張る。氣を張つて油斷をしなかつたから、一生人に後指を差されるやうな過失はなかつた代り、餘り人に愛しもされずに年を取つてしまつて父の代となつたのである。

父は祖母とはまるで違つてゐた。如何して此の人の腹にこんな人がと怪しまれる程の好人物で、顏もさつぱり似てゐなかつた。大きな、笑ふと目元に小皺の寄る、ふつくりした如何にも愛嬌のある圓顏で、形も大柄だつたが、何處か圓味があり、心も其の通り角が

なかつた。快活で、蟠りがなくて、話が好きで、碁が好きで、暇さへ有れば近所を打ちあるき、大きな嘘を自慢にする程の罪のない人だつた。祖父がやはりさうであつたといふから、大方其の氣象を受繼いだのであらう。

父はこんな人だし、母は――私の子供の時分の母は、手拭を姉樣冠りにして襷掛けで能くがし〳〵働く人だつた。其の頃の事を誰に聞いても、皆お母さんは能く辛抱なさつたとばかりで、其の他に何も言はぬから、私の記憶どほりに母は、何時まで經つてもやはり手拭を姉樣冠りにして、襷がけで能くがし〳〵働く人で、格別如何といふほどの人でもなかつたらしい。

かういふ家庭だつたから、自然、祖母が一家の實權を握つてゐた。家内中の事一から十迄、祖母の方寸に捌かれて、母は下女か何ぞの樣に追ひまはされる。父も一向家事には關係しないで、形式的に

相談を受ければ、よいでせう、とばかり言つてゐる。さう言つてゐないと、祖母の機嫌が悪い、面倒だ。

母方の伯父で、在方で村長をしてゐた人があつた。如何したのだか、祖母とは中悪で、死後迄餘り好くは言はなかつたが、何かの話の序に、お母さんもお祖母さんには隨分泣かされたものだよ、と私に言つた事がある。成る程、折々母が物蔭で泣いてゐるといつも元氣な父が其の時ばかりは困つた顔をして、何かひそ〳〵言つてゐるのを、子供心にも不審に思つた事があつたが、それが伯父のいふお祖母さんに泣かされてゐたのだつたかも知れぬ。

兎に角、祖母は此の通り氣難かし家であつたが、その氣難かし家の、死んだ後まで噂に殘る程の祖母が、如何いふものだか、私にかゝると、から意氣地がなくなつたのである。

何で、祖母が私にかゝると、意氣地が無くなるのだか、其れは私に

は判らなかつた。が、兎に角意氣地のなくなるのは事實で、評判の氣難かし家が、如何にでも私の思ふ樣になつてしまふ。

まづ何か欲しい物がある。それも無い物ねだりで、有る結構な干菓子は嫌で、無い一文菓子が欲しいなどと言出して、母にねだるが、許されない。祖母にねだる。一寸澀る。首玉へ嚙り附いて、ようようと二三度鼻聲で甘える。と、もう祖母は海鼠の樣になつて、

「お由――母の名だ――あんなに言ふもんだから、買つて來てお遣りよ。」といふ。祖母の聲がゝりだから、母も不承々々起つて、雨降りでも私の口のお使に番傘傾げて出懸けようとする。かうなると、流石の父ももう笑つてばかりは居られなくなつて、小言をいふ。

私が泣く、祖母の機嫌が悪い。

「こんな小さい者をそんなに虐めて育てて、若しか俊坊の樣なことにでもなつたら、如何おしだ。可哀さうぢやないか。」

と、いふのが口切りで、ぽつり〳〵と始める。俊坊といふのは私の兄で、私も虚弱だつたが、やはり虚弱で、六つの時とられたのださうだ。それも急性胃加答兒でとられたのだといふから、事に寄ると祖母が可愛がりごかしに口を慎ませなかつた祟かも知れぬ。併し、虚弱な兒は大食させつけると達者になると言はれて、さうかなと思ふ程の父だから、祖母の矛盾には氣が附かない。やはり、有觸れたさうわが儘をさせ附けては位の所で切拔けようとする。祖母も其れはさう思はぬでもないから、内々自分が無理だと思ふだけに激する。言葉が荒らくなる。もう此の上憤らせると、又三日も物を言はなかつた擧句、ぷいと家を出て在方の親類へ行つた切り歸らぬといふ騒も起こりかねまじい氣色なので、父は默つてしまふ。母も默つて出て行く。と、もう二十分も經つと、私が兩手に豆捩を持つて雀躍して喜ぶ顔を、祖母が眺めてほく〳〵する事

になつてしまふ。

二七　響りん〳〵音りん〳〵

―長谷川二葉亭―

響りん〳〵音りん〳〵
うちふりうちふる鈴高く
馬は蹄をふみしめて
故郷の山を出づるとき
その黒毛なす鬣は
涼しき風に吹亂れ
その紫の兩眼は
青雲遠く望むかな
枝の緑に袖觸れつ

あやしき鞍に跨りて
馬上に歌ふ一ふしは
げにや遊子の旅の情

あゝ稚くて國を出で
東の磯邊西の濱
さても繫がぬ舟のごと
夢長きこと二十年
たま〳〵ことし歸りきて
昔懷へば古里や
蔭を岡邊に尋ぬれば
松柏すでに折れ碎け
徑を川邊にもとむれば

野草は深く荒れにけり
菊は心を驚かし
蘭は思を傷ましむ
高きに登り草を藉き
惆悵として眺むれば
檜原に迷ふ雲落ちて
涙流れてかぎりなし

去ね〳〵かゝる古里は
ふたたび言ふに足らじかし
あゝよしさらばけふよりは
日行き風吹き彩雲の

あやにたなびくかなたをも
白波高く八百潮の
湧立ちさわぐかなたをも
かしこの岡もこの山も
いづれ心の宿とせば
しげれる谷の野葡萄に
秋のみのりはとるがまゝ
深き林の黄葉に
秋の光は履むがまゝ

響りん〳〵音りん〳〵
うちふりうちふる鈴高く
馬は頭をめぐらして

雲に嘶きいさむとき
かへりみすれば古里の
檜原は目にも見えにけるかな。

—島崎藤村—

二八　日本だ

黒潮に乘つて私は、一晝夜に三百二十海里の餘を歸つて來た。故國は今どんな風に變はりつゝあるだらう。これからさきどんな風に變はつて行くだらう。もう一度、自分が故國を見得るの日は、どんな風に變はつて居るだらう。かうした想像は過ぐる三年の間、自分から離れなかつた。もし幸に無事で故國に辿り着くことが出來たら、日頃親しい人々の恙ない顔を見て、思ふさま國の言葉を話さう、あの事も聞いて見よう、この事も聞いて見ようと、さま

ざまに思ひ設けて來た。その故國の方へ、私は漸く近づきつゝあつた時だ。私の乘つて來た汽船熱田丸は、やがて九州の南端に近い海上まで歸つて來た。そこまで歸つて來ると、大隅群島の一部が見えるといふ聲を聞いた。日本だ。一緒に乘合はせて來た人人は、いづれも甲板に集まつて、七月の日に光る海のかなたに、遠く顯れた島々の影を望んだ。新嘉堡・香港・上海と寄港する度に、吾儕(われら)の熱田丸では內外の乘客を加へたから、その時甲板に集まつて、互に歡喜を分かつた男女の數はかなりにあつた。しかし、倫敦出發以來、五十餘日の長い航海の後で、ある時は南阿弗利加のダアバンから新嘉堡に到るまで殆ど陸を見ることなしに、毎日々々海ばかり眺め暮らして來たやうな、さういふ極く少數の乘客のみが、眞にその場合の歡喜を分かち合つた。そして私もまたその一人であつたのだ。あたかも、日光の渴きを激しく感ずるものが、爭つて日

の出を望まうとするやうに、吾儕もまた激しい陸の饑から救はれようとした。

しかし、これは陸の饑ばかりでも無い。私に取つては、故國の饑だ。すくなくも私が思鄕の念は、あの長期の航海を續ける、船乘などの心に似たものであつた。陸の上に倒れ伏し、懷しい土に接吻したいとさへ思ふ、といふ船乘の心は、全く自分の同感し得るところであつた。私はこんなことさへ胸に描いて歸つて來た。もし、上陸して出遇ふ最初の日本人があつたなら、知ると知らぬに關はらず、その人の側に走り寄らう。出來得ることなら、堅くその人を抱き締めよう。そして、自分は遠い國の方から歸つて來たものであるといふその心を告げよう……と、實際、私は戲れて居るのでは無かつた。それほど人懷かしい心をもつて歸つて來た。

私は熱田丸の甲板の上から土佐の室戸崎を望んだ。所謂「お鼻」

といふところだ。二十三年前、高知に舊友を訪ねようとして、ひどく波濤に搖られた記憶のあるところだ。私はまた紀伊の沿岸を望み、淡路島を望んで來た。翠色の滴るやうな日本の島影は、亞細亞の他の地方に比べて、如何程その趣を異にして居るか、今度の航海はそれを語つた。

水夫等よ、錨の用意せよ、港は近づいたぞ。七月三日の夜のことであつた。吾儕の熱田丸は客船と言ふよりも、貨物船と言ふべき程で、――實際、この戰時に際して貨物船で無い定期船があらうか。――英吉利から積んで來た多量な鐵材をはじめ、マレー半島からも、支那からも積んで來た種々な荷物を船庫に滿載しつゝ、豫定の時刻に遲れまいとして神戸をさして急いで來た。

その時はもう、遠くちら〳〵燈火が見えた。いかに遲くならうとも神戸に着くまでは眠るまい、皆起きて居よう、かく人々は互に言合はせた。仄暗い電燈に照らさるゝ甲枚の上には、たゞ上陸を待佗ぶる心のみがあつた。私も甲板の欄近く行つて、遠く暗い海のかなたに、點々とした美しい燈火のかゞやきを望んだ。あれが神戸だらうか、いや、あれは明石だ、と傍に立つて敎へて吳れる船員がある。次第にその光は輝きを增して來た。數をも增して來た。彼處にも、此處にも、と言ふやうになつた。闇に隱れた山の容は見えないまでも、高く傾斜らしいところに續く燈火があり、港に滿ちた燈火があり、海岸には海岸らしくそれと知り得る燈火の列が、水に接して並び輝くあたりは、そこがもう神戸であつた。

和田岬の燈臺近く、吾儕の船が到着した頃は、夜の十一時過ぎであつたから、規則通りの檢疫を受ける爲には、翌朝まで待たなければならなかつた。いよ〳〵一夜は沖合に碇泊することと定まつ

た。海上の闇を縫うて幾つとなく、燈臺のかげを流れ過ぎる火の鴛鴦のやうなのは、あれは漁に出かける船だと心づくにつけても、漁船を見ることの多い、日本近海の豐富さが思ひ出される。この一夜の碇泊は、日中の入港にも勝つて、全く好い印象を與へた。假に私が晝日中着いたとしたら、成る程、神戸附近の山々の容は好く見えたらう。海岸の旅館、その他多くの建築物、鐵骨の顯れたる船渠などは好く見えたらう。多くの汽船と、帆柱と、煙筒と、旗と、赤く塗られたる新造中の船と、その間を動くランチ、日本風の荷船・小舟・艀などの、その港のごちや〳〵とした光景は好く見えたらう。しかし、さういふ煩はしい細目の他に、何物が私の記憶に殘つたらうか。夜はちがふ。眞個にそこには何も無いやうで、何もかも有つた。日中に感じ得られたらうと思ふよりは、より以上のものが有つた。星のある七夕の空は、殆ど水と抱き合つて、廣大無邊な暗夜

の實在を感知せしめるのは、かういふ晩だ。天涯萬里といふ言葉を、その儘當嵌め得るやうな遠い旅路の末に、東方の果の果なる、故國の入口へと漸く辿り着いたことを感知せしめるのも、かういふ晩だ。

—島崎藤村—

註—**ダアバン**。亞弗利加の東岸で南端に近い港町の名。
室戸崎。四國の東南端の崎名。無論高知縣に屬してゐる。
和田岬。神戸市の南角にあたり東方に向かつて出てゐる岬名。

二九　父と母と

いづくにか父の聲きこゆこの古き大きなる家の秋のゆふべに

—若山牧水—

かなしきは我が父！
今日も新聞を讀みあきて
庭に小蟻と遊べり
—石川啄木—

つとめより、夜霧の街をかへるとき
心しめやかに、
母をおもへり
—土岐哀果—

たらちねの母に連れられ川越えし田越えし事もありにけむもの
—齋藤茂吉—

—名人の話・名器の物語—

三〇　大雅と錦の袋

近頃考古學の知識が一般にひろまるにつけて、古い民族の遺蹟だと言傳へられた地方へ往くと、物ずきな蒐集家が鵜の目鷹の目で、石器の破片か何かを嗅ぎまはつてゐるのをよく見かける。

池大雅は風景畫家だけに、よく方々を旅行しまはつたものだが、到るところで珍しい瓦だとか、石だとかを拾つて歸るのを忘れなかつた。ある時奥州へ往つて、勿來の關址を訪ねた事があつた。その折も大雅は京都に殘しておいた家族の事などは、すつかり忘れてしまつて、珍しい瓦を捜さうとして雜草の生え繁つたなかを這廻つてゐた。

大雅は、學者や藝術家によくある「恍惚」の境地にすぐ這入れる畫家で、面白い話をするか、いゝ景色を見るかすれば、その瞬間は借金や家族やのある事も、すつかり忘れる事の出來る程重寶な心をもつてゐた。ある時、遠國に旅立をしようとして、家を出たことがあつた。そのあとで妻の玉瀾は、大雅が命より大事な筆を忘れてゐるのに氣がついたので、それを持つてすぐにあとを追ひかけた。そして忘れ物だと言つて筆を手渡しすると、大雅は鄭重に頭を下げた。

「どなたか存じませんが、御親切に有りがたう存じます。」

家を出て、道の五六町も來ぬうちに、この不思議な畫家は、もう妻の事をも忘れてゐたのだ。

大雅は草のなかの窪地で、やつと古瓦を見つける事が出來た。で、叮嚀に土を拂ひ落として、持つて來た錦の袋にそれを納めて首

にかけた。

そぼろな、旅窶れのした姿をした旅人が、美しい錦の袋を大事さうに胸に下げてゐるので、胡麻の蠅はすぐ附いた。三日といふもの、二人の胡麻の蠅は大雅の後をつけて、宿に泊つたり、宿をたつたりした。

四日目の正午すぎ、大雅がある茶店の店さきに憩ふと、胡麻の蠅二人も同じやうに、そこへ來て腰をおろした。そしてじろ〳〵横眼でこの畫家の素振を見ては、ひそ〳〵話をしてゐたが、その一人はだしぬけに大雅に話しかけた。

「旦那、旦那はどこまでお出かけでござんすね。」

「私か。」大雅は馬に話しかけられたやうに、けげんさうな顏をした。「私の旅はどこといふあては無いのだ。」

「へえ、可笑しな旅ですね。」胡麻の蠅は鬚の伸びかゝつた頤に冷

やかな笑を浮かべた。「それにしては御心配でせう。そんなに大金をお持ちでは。」

「大金を？　私は大金など持つては居ないが……。」

大雅は大金があつたら、是非買ひたいものの幾つかを腹のなかで考へながら、相手の顔を不思議さうに見た。二人とも變な顔をしてゐたが、それでも大雅がよく描いてゐるやうな變な顔よりは幾らかましであつた。

「旦那、白ばくれちやいけませんぜ。」今一人の胡麻の蠅はぞんざいな口をきいた。「金でなくてその錦の袋には、何がは入つてゐるんだね。」

「ああ、これかい。」と大雅はやつと胸の錦の袋に氣がついた。皮肉な笑を口もとに浮かべながら、そろ〳〵錦の袋を開けにかゝつた。胡麻の蠅二人は眼を光らした。大雅は中から古瓦を引張り出した。

「お前さん達も、こんな物がお好きだと見えるな、これは勿來の關の古瓦だが……。」

胡麻の蠅はあつけにとられた。そして古瓦を金と見ちがへた自分達の眼利の幼稚さを恥ぢた。「まあ、お前さん達、この瓦の燒色のよさを見なさい。」と、大雅は胡麻の蠅のあきれてゐるのにかまはず、獨りで古瓦を撫でて悅に入つてゐた。

—薄田泣菫—

註—池大雅。名は無名。京都の人で畫の大家である。安永五年、年五十四で歿した。
玉瀾。大雅の妻。名は町といつて、やはり畫家であつた。天明四年、年七十八で歿した。

三　形

攝津半國の主であつた松山新介の侍大將、中村新兵衛は五畿內中國に聞こえた大豪の士であつた。

その頃、畿内を分領して居た筒井・松永・荒木・和田・別所など大名小名の手の者で、「槍中村」を知らぬ者は、恐らく一人もなかつただらう。それほど新兵衛はその扱き出す三間柄の大身槍の鋒先で、魁殿の功名を重ねて居た。その上彼の武者姿は戰場に於いて、水際立つ華やかさを示して居た。火のやうな猩々緋の羽織を着た彼の姿は、敵味方の間に輝くばかりのけざやかさを持つて居た。

「あゝ猩々緋よ。」と、敵の雜兵は新兵衛の槍先を避けた。味方が崩れ立つた時、激浪の中に立つ巖のやうに敵勢を支へて居る猩々緋の姿は、どれ程味方にとつて頼もしいものであつたか分からなかつた。又嵐のやうに敵陣に殺倒するとき、その先頭に輝いて居る猩々緋の羽織は、敵にとつてどれ程の脅威であるか判らなかつた。

かうして、槍中村の猩々緋は、戰場の華であり、敵に對する脅威であり、味方にとつては信頼の的であつた。

「新兵衛どの、折入つてお願がある。」と、元服してから、まだ間もないらしい美男の士は、新兵衛の前に手を突いた。

「何事ぢや、そなたとわれらの間に左様な辭儀は入らぬぞ、望と云ふを早う云うて見い。」と、育むやうな慈顔を以て、新兵衛は相手を見た。

その若い士は、新兵衛の主君松山新介の側腹の子であつた。そして、幼少の頃から新兵衛が守役として、我が子のやうに慈み育てて來たのであつた。

「外の事でもおりない。明日はわれら初陣ぢやほどに、何ぞ華々しい手柄をして見たい。ついては、御身樣の猩々緋を貸してたもらぬか。あの羽織を着て、敵の眼を駭かして見たう御座る。」

「はゝゝゝ、念もない事ぢや。」新兵衛は高らかに笑つた。新兵衛は、相手の子供らしい無邪氣な功名心を快く受入れることが出來た。

「が、申して置く。あの羽織は、申さば中村新兵衛の形ぢやわ、そなたがあの羽織を身に着ける上からは、われほどの肝魂を持たいでは叶はぬことぞ。」

と云ひながら、新兵衛は又高らかに笑つた。

そのあくる日、攝津平原の一角で、松山勢は大和の筒井順慶の兵としのぎを削つた。戰が始まる前、何時ものやうに猩々緋の武者が、敵勢を尻目にかけて、大きく輪乘をしたかと思ふと、駒の頭を立てなほして、一氣に敵陣に乘入つた。

吹分けられるやうに敵陣の一角が亂れた處を、猩々緋の武者は槍を付けたかと思ふと、早くも三四人の端武者を突伏せて、悠々と味方の陣へ引きかへした。

その日に限つて、黑革縅の鎧を着て、南蠻鐵の兜を被つて居た中村新兵衛は、會心の微笑を含みながら猩々緋の武者の華々しい武

者振を眺めて居た。そして自分の形だけすら、此ほどの力を持つて居ると云ふことに、可なり大きい誇を感じて居た。

彼は、二番槍は自分が合はさうと思つたので、駒を乘出すと一文字に敵陣に殺到した。

猩々緋の武者の前には戰はずして浮足立つた敵陣が、中村新兵衛の前にはびくともしなかつた。その上に彼等は猩々緋の「槍中村」に突き擾された恨を、此の黑革縅の武者の上に復讐せんとして猛り立つて居た。

新兵衛は何時もとは勝手が違つて居ることに氣が付いた。何時もは虎に向かつて居る羊の樣な怖氣が敵に在つた。彼等がうろたへ血迷ふところを突伏せるのに、何の雜作もなかつた。今日は彼等は對等の戰をする時のやうに、勇み立つて居た。どの雜兵も〳〵十二分の力を新兵衛に對して發揮した。二三人突伏せる

ことさへ容易でなかつた。敵の槍の鋒先が、ともすれば身をかすつた。

新兵衛は必死の力を振つた。平素の二倍の力をさへ振つたが、彼は兎もすれば打負けさうになつた。手輕に猛々緋を貸したことを後悔するやうな感じが頭の中をかすめた時であつた、敵の突き出した槍が、縅の裏をかいて彼の脾腹を貫いて居た。

—菊池寛—

註—**松山新介**。足利義昭時代、即ち群雄割據の戰國時代の一領主。

中村新兵衛。常山紀談によれば、近江國のもので、同國佐々木氏の臣とある。一日、槍を合はすこと十七度、首四十一級を得たことがあつた爲、槍中村の名をうけたと云ふ。

筒井云々。筒井、松永兩氏は大和、荒木、和田兩氏は攝津、別所氏は播磨を領してゐた。こゝの話は、織田、豐臣時代のことに屬してゐる。

筒井順慶。信長の信任厚く、松永久秀を殺した時、大和に封ぜられたが、信長が光秀に弑された時、光秀の招きに應じて馳せゆかんとした。しかし、他の諫止によつて、また秀吉に從つたので世の人日和見の順慶と嘲つたさうである。天正十二年歿、三十六歳。

三 石段と石碑

一 道成寺の石段

徳川時代の初に、本願寺の役人に下間某といふものがあつた。亂舞にかけてはなか〳〵の巧者で、徳川家の前などでも、いつも召されて亂舞を舞つてゐた。

ある時、この男が紀州の道成寺に詣つた事があつた。その折も例のやうに拍子をふみ〳〵石段を數へてゐたが、ふと立止まつて、不思議さうな顔をして連れの人にいつた。

「この鐘樓の石段は、一つだけ土にでも埋もれてゐるんぢやなからうか。今、一つづゝ踏んでみるのに、どうしても段拍子に合はない。」

連れは可笑しな事をいふとは思つたが、相手があの通りの巧者だから、笑つてばかり濟ますわけにもいかないで土を掘り下げて見ると、案の定、下から石段が出た。

京都の桂離宮は、小堀遠州が豐太閤に賴まれて、一世一代の積りで拵へた名園だが、ずつと後になつて、遠州の孫が、その結構を見に庭へ入つた事があつた。木戸口を潜つて庭石を二つ三つ踏んだと思ふと、ひよいと立止まつたまま、

「どうも解らない。」

とぢつと考へこんでしまつた。案内の男が、

「何がお解りになりませんか。」

と聞くと、

「いや、この石だが、も少し右に置いてなければならん筈なのだ。」

と、獨言のやうに答へた。考へて見ると、一二年前に庭木を入れた

ことがあつて、その折、件の庭石を動かしたが、植木屋の手で勝手に据直してあつたのだ。

このやうに、物にはちやんと拍子といふものがある。この拍子を見別けるやうになると、眞の物の巧者だといへるのである。

二　歐陽詢と石碑

むかし唐の歐陽詢が、馬に乘つて、ある古驛を通りかゝると、崩れかゝつた道端に、苔のへばりついた舊い石碑が立つてゐるのが目についた。碑の文字はちつと見にも捨難い味ひがあつた。ちやうどそこへ、百姓が一人通りかゝつた。手には引いたばかりの大根を提げてゐる。歐陽詢は、

「ちよつと――。」

と言つて呼びとめて聞いてみた。

「この碑は誰の書だね。お前知つては居なからうな。」
「知らねえと思ふ人に、何故聞かつしやるのだ。」
百姓はかまきりのやうにむくれた顔をあげた。
「これはあ、索靖といふ偉い方の書だつぺ。」
「ふん索靖か。」
と歐陽詢は百姓の方を見向きもしないで、馬を止めたまゝ、ぢつと石碑の文字に見とれてゐた。馬は仕合せと文字の鑑定が出來なかつたので、その間にせつせと道端の草を食べてゐた。
暫くすると、歐陽詢は氣がついたやうに馬をせき立てた。馬は食べさしの草を啣へたまゝ、ぽか〳〵と歩き出した。やつと小一丁も來たかと思ふと、歐陽詢は、だしぬけに手綱を引つ張つて、馬を引返らせようとする。馬はむら氣な主人の仕打を笑ふやうな顔をして、また後戻りをした。

歐陽詢は馬から飛下りて、石碑の前に立つた。そして、
「巧いな。」
と言ひ〳〵小首を傾けたまゝ、いつまでも〳〵文字に見惚れてゐたが、とう〳〵立草臥れたかして、馬の背から敷物を取下ろして、その上にべつたりと腰をおろした。
そしてその晩も、あくる晩も、またあくる晩も、その石碑の下に野宿をして、ぢつと石碑の文字に惚々してゐるので、馬はとう〳〵腹を立てて、其處の草原にごろりと横になつた。横になつたからと言つて、馬は猫や學者のやうに哲學などは考へなかつた。馬はたゞ食ふ事ばかり考へてゐた。
歐陽詢が馬を起こして、やつと石碑のところを去つたのはちやうど四日目の朝だつた。

—薄田泣菫—

註—下間某。名は少進。文祿頃の人。

亂舞。らつぷとも云ふ。鎌倉時代頃から宮中に宴會などの催された時、催馬樂（さいばら）などと云ふ舞樂と同樣に、舞はれた散樂の一つである。

道成寺。日高郡。日高川の傳說に名高い寺。

桂離宮。京都府、下桂村にある離宮。桂川に臨む。

小堀遠州。名は正一。遠州流茶式の祖。正保四年歿した、年六十九。

歐陽詢。隋に仕へて太常博士となり唐に仕へて弘文館學士となつた學者。貞觀十五年歿した、年八十五。

書だつぺ。俗語であつて、「書である」との意。

秦靖。晉の武帝の臣。草書の名人として知られてゐる。

三　徒然草

評判の木登りといはれた男が、手下に指圖して喬木に登らせ梢を伐らせたのに、甚く危く見えた時は默つてゐて、下り初めて、最早軒高になつた時、「怪我をすな。用心しろ。」と始めて言葉をかけて、彼を戒めた。

「軒高になり、飛びおりもされるやうになつて、どうして彼那（あんな）ことを云ふのです？」と、弟子はそれを詰問した。

「そこだよ。目がくるめき、枝がひわ〳〵する時は、自分で恐れてゐるから、却つて俺は默つてる。過は、もう大丈夫と安心した時に屹度起るものだ。」と、師匠がそれを說明したさうである。

明雲座主（*）が人相見に向かつて、「わしはひよつと、兵仗の難があり はすまいかね。」と尋ねられると、人相見が、「如何にもその相が御座りまする。」と返辭した。

「では、どういふ相があるかね。」とお訊きになると、「傷害の懼がおありなさるべき筈のない御身ながら、かく〳〵拙者に御尋ねなさる。それが既にその危ぶみの兆で御座らう。」と申しあげた。

果して、座主はその後矢に中つて死んでしまはれた。

城の陸奥の守泰盛は、無雙の馬乘であつた。が、馬を引出させる時、馬が足を揃へて、敷居をゆらりと越えるのに氣付くと、「此は勇んでゐる馬だ。」と言つて、他の馬に鞍をおきかへさした。また、足を延ばしてゐて、敷居に蹴當てると、「此は鈍くて過失があらう。」と言つてそれにも乘らなかつた。

道を知らない人は、どうして斯程迄に馬を恐れようか、恐れるものはあるまい。

茲に、吉田といふ名高い馬乘も、次の樣なことを語り殘してゐる。

「どんな馬にしても、それ〴〵手ごはいものである。とても、人力を以てそれに爭はれないことを知らなければいけない。乘馬の際は、まづよく視て、その强い點と弱い所とを見拔くべきである。なほ、轡や鞍の具に危なさうなところはないか。そこを

よく檢べて、一寸でも氣懸かりの箇處があつたら、決してその馬に乘つてはならぬ。

この用意を忘れないのを、眞の馬乘と申すのである。これは馬乘の祕訣とすべきことであらう。」と。

ある人が、弓射ることを習ふに、兩矢を手挾んで的に向かつた。此を見て師匠は、

「初心の人は、二つの矢を持つてはならぬ。第一の矢になほざりの心がそはる。毎度一本にきめて、その一本をあてようと覺悟せよ。」

と、戒めた。僅に二本の矢である。それも師の面前で射るのに、その一本を疎そかにするなどと誰が氣付かう。でも、自分の氣付かないだけで、師はこれをちやんと見拔いてゐるのである。

道を學ぶ人の多くは、夜になると翌朝のあることを思ひ入れ、朝にはまたその夜のあることを思ひ入つて、勉强の時を引延ばし引延ばして、現在を徒然に遊んでしまふ。だから、どうして一刹那、その刹那の心の中にすでに懈怠の念の潜んでゐることを氣付き得ようか。それは宛ら、二本の矢を手挾んでゐる人の、最初の一本を疎かにするに變はりがない。

「藝能を身につけようとする人で、未熟の間はなまじひに他人に見られまい。うち〳〵に習ひ上げて人仲に出るのが心にくいものだと云つてる人が多いやうだが、恐らくそんな人は一藝も習ひおほすことが出來まいと思ふ。

反對に、不練れで手のきまらないうちから、上手の人々に交り、譏り嗤はれても更に怖ぢず、平氣で過ごして嗜むやうな人は、假

令生まれつきにその器は無くとも、道に泥まず、濫りにしないで年を經れば、天性堪能ながら嗜まない人に較べ、遂には優つて、德も長け、他にも許され無双の名人ともなりうるものである。」

と、天才とまで謠はれたさる琴師が語つてゐた。

圍碁の名人と名の通つた人に、「どうしてあなたはお勝ちになるのです。祕傳を教へて下さい。」と賴み込むと、その人は事も無げに、

「勝たうと思つて打つてはなりませぬ。專心負けまいと思つて打つべきである。どの手が一番危ないかを思ひ用心して、その手を更に使はず、一目でも遲く負けるべき手の方にまづ手をつけなされ。」

とのみ教へてくれたさうである。

筆を取ると、つい何か書いて見たくなり、樂器を握るとつい鳴らして見たくなる。盃を取れば酒が欲しくなり、賽を取ればこれを振つて數を出して見たくなる。人間の心と云ふものは、屹度事々に觸れて出てくるものである。あからさまにでも聖教の一句を見ると、自然その前後の文章も見たくなる。心が一向に進まなくとも、佛前で數珠をとり、經を手にすると、怠り心も自づと消えてなくなるであらう。體の働きと心の働きとは、決して別のものでは無い。

この言葉は、信仰心の上についてのみならず、諸藝能の修練の上についても言はれる名言であらうと思ふ。

—徒然草口譯による—

註—徒然草。南北朝時代の兼好法師のかいた隨筆集の書名。
明雲。延暦寺の座主、壽永二年源義仲が上皇を法住寺に攻めた時、流れ矢にあたつて寂した。
城の陸奥の守泰盛。安達義景の子、秋田城介であつたが更に弘安年中陸奥守を兼任した。

三四　古名匠の言

自分はこのほど京阪を旅して歸つたが、一日宇治平等院を訪ひ、今も昔の名を殘してゐる扇*が芝に立つて、源三位頼政を忍んだ事であつた。「埋木の」といふ歌を思ひ出すと、武人であつてまた勝れた歌人であつたかの頼政の人となりが、今も鮮かに思ひうかべられる。頼政は如何にも歌人としてすぐれた一人であつた。頼政に就いて、鴨*長明の無名抄の中に、「頼政歌道にすける事」といふ一節があるが、それを見ると、次の如く書いてある。

「俊惠云、頼政卿はいみじかりし歌仙なり。心の底まで歌になりかへりて、常にこれを忘れず、心にかけつゝ、鳥の一聲啼き、風のそゝと吹くにも、まして花の散り、葉の落ち、月の出入、雨雪などの降るにつけても、立居おきふしに風情をめぐらさずといふことなし。誠

に秀歌の出くるも理とぞおぼえ侍りし。」

こは賴政が、日常遭遇するところのさまざまの事柄に對して、常に注意を怠らず、到るところに詩趣をもとめ出した人で、所謂心の底まで歌になりかへつた人であることを讃へたのである。

この、心の底まで歌になりかへるといふ境にいたるのは、なかなか容易ではないが、折ふしのうつりかはり、月花のながめ、凡て何事によらず注意をするといふ事が、歌をよむ上には最も大切である。この注意が缺けては、決してすぐれた歌は出來ぬ。ぼんやりしてゐては、目もと耳もとにみちてゐる詩趣を、たゞ見逃してしまふのみである。歌よむ人は、いつまでも、如何なる時でも、自分の周圍に存してゐる詩趣をとらへて逸しない心掛が必要である。それには、こまかい注意を以て、周圍に對する事が必要である。田舍道を歩いても、歌心のある人は、さびしい藁家の軒に咲いてゐる花

をも心にとめるが、歌心のない人は別段に注意せずに通つてしまふ。自分がある時、茸狩にいつた折に、そこは、とめ山であつて、かつ特に山番から選ばれた場所に來て探しながら、どうしても見つからない。しかも山番から指ざされて注意して探すと、直ぐ足もとにあつた事がある。これは自分の注意が足らなかつたのである。と共に、また自分の目があいて居なかつたのである。又かういふ事がある。自分が潮干狩に行つて獲物を探したが、どうしても見當たらぬ。それで伴なつた人の詞を聞いて、砂の中に小さく殘された孔をめあてに、その眞下を掘つたところが、續々と取る事が出來た。これも亦自分の探す目が、それだけの素養がなかつたのである。併し、潮干狩にせよ、また茸狩の場合にせよ、段々注意に注意がつんで行つた結果として、自然適當な見つけどころもわかつて來るのである。この見つけどころは、和歌の方でいはば、着眼點と

良寛の畫像及び筆蹟

か、着想とかいふものである。我々は絶えず周圍に注意して、詩趣を求めてゐれば、馴れて來るに隨つてすぐれた着眼點を養ひ得るのである。何にせよ、歌よむ人に大切なのは、萬事をかりそめに見すぐしてしまはないといふ事である。これが詠歌の門に入つて、賴政のやうな、心の底まで歌になりかへつた、所謂歌道にすける人となるべき第一歩である。そして更にすゝんでは、單に日常經驗するところを注意するばかりでなく、かの基俊*の著となつてゐる悅目抄に記された如く、「心をひとつところにおかずして、十分にはたらかして、山野河海にやさしき風情を求むる。」のが必要である。これ卽ち想像を働かすべきことを說いたものである。

古名匠の言には、さすがに味はひふかい面白いものがある。自分はその言によつて、かくは語つたのである。

—佐々木信綱—

註—扇が芝。宇治の平等院の中にあつて、源三位賴政の自刄したところ。

鴨長明。京都の鴨社の禰宜長繼の子であつて、蓮胤と稱して大原山に入つた。後、更に日野山に隱れ、山中に方丈の室を結んで餘生を送つた。方丈記は其の著である。

源俊。姓は藤原。歌人である。平安朝末期に源俊賴と並び稱された。

三五　良寛和尚の習字法

良寛和尚は第一の習字法として、毎朝空中習字といふことを怠らずやつて居たといふことである。其の所謂空中習字法といふのは、朝早く起きて、たゞ獨り戸外に立出で、ちやんと姿勢を正して直立し、さて右の手を大空に向かつて力強く伸べ、指頭を以て空中に思ふさま自由に、大きく、のびゝと字を書くのだといふのである。

此の事を知つてから私も時々それを試みた。時には朝早く、ま

だ日光のさゝない、しつとりと濕つた砂濱のたゞ中に立つて。時には、夕ぐれ雜草の繁茂した自分の家の庭の隅に立つて。時にまた、夏の眞晝の小山の頂に立つて。だが、いかなる場所、いかなる時になつても、それはいつまでも私の心には、まことに貴い經驗であり、不思議な喜びであり、しかも同時に全身的訓練であつた。私はそれによつて自分が能書家になることなどを豫期してはゐなかつた。さうした事よりも、寧ろ私には新鮮な大氣の裡に姿勢を正して直立し、ひろ〳〵とした大空に向かつて手を力强くさしのべる、そのことだけでも既にいふばかりなき快事であつた。しかも、かくして大空に向かつて、わが指頭をもつて書きあらはした文字の偉大さと自由さとを、われみづから眺め、且味はふ刹那の暢びやかな、ひろやかな心持！

良寛和尙はさうした方法で、毎朝千字文一卷を書き習つたといふことであるが、私達はそれを單なる手習ひとしてのみ見ることは出來ない。試みに、快く晴渡つた秋の朝などに、さうした方法で自分の最も好む文句でも、一字々々しつかりと書いて見るとする。その刹那、私達の內部に感ずるところのものは、決して單なる書の妙味などではないであらう。そしてかくの如き事を、日を追うて幾度となく繰返すことによつて、いつとはなしに私達は、何等かそれの貴い影響を蒙らずには居ないであらう。

今更のやうではあるが、私はかうした事の實驗によつて、かう言つた風な全的な氣分的な休養、又は修養效果の決しておろそかに出來ないものであることを痛切に知ることが出來た。現代では、かうした超科學的な、非實際的な修養法はあまりに輕んぜられ、甚しきは無視せられ、斥けられてまで居るけれども、しかし人間の生活の本當の幸福を得るためには、此の種の氣分的な全的な修養は、

決しておろそかにしてはならぬのではなからうか。人間の生長と向上とのための方法は、決して單に科學的又は合理的にのみ考案せらるべきものではなくして、一方にはどうしても前述の如き、幾多の氣分的又は全的な修養、又は訓練がなくてはならぬと信ずる。そして此の方面に於いては、西洋より東洋の方が昔から非常に進歩して來て居るやうに思はれる。寧ろその種の事は、東洋的といふ形容詞を冠らせてもいゝほど、特色的であるやうに思はれる。しかも、今日の私達は、その種の事の意義と價値とをあまりにおろそかに考へ過ぎて來たやうに思はれてならない。

「坡*丈といふものあり、俳諧歌者なり、自ら拙書を嘆ず。師(良寛)之を聞きて曰く、妍媸に心を勞する事なかれ、書自ら成らんと。坡丈之より字を書くに易きを得たりと。其の徒若水語る。」かういふ

ことが、良寛和尙と親交のあつた解良三郎兵衛榮*重といふ人の「良寛禪師奇話」と題した手記中に書いてあつた。「どうしたらば字がうまく書けるか。」との質問に對して、「どうしたらばうまく書けようなどといふ事に心を勞しさへしなければ、自然に字がよく書けるやうになる。」といふ答は、あまりに人を馬鹿にしたやうな言方である。しかし、一寸聞くと皮肉のやうな、反語のやうな、また單なる警句に過ぎないやうな、良寛和尙の此の言葉のうちにも、やはり味はひつくせぬほどの妙味がある。おそらく常人にとりては、「字がどうしたらばうまく書けようか。」と思ふ一念に凝固まることよりも、良寛和尙の言の如く、どうしたらば字がうまく書けようかなどといふことに、心を勞しないで居ることの方が、遙かに困難な事であらう。これは單に、書道についてばかりでなく、人生のあらゆる方面の修養についても、誠にありがたい貴い教訓である。

良寛和尚は常に、自分の嫌ひなものが三つある。それは書家の書、料理人の料理、詩人又は歌人の詩歌であると言つて居たといふことであるが、まつたく良寛和尚その人の全體としての生活に向かつての理解のない者には、良寛和尚の書や詩歌の眞の妙味も感じられる筈がないのである。

良寛和尚から學ぶべきは、藝術ではなくして、寧ろ生活そのものの光であり、力であり、救である。――私達のやうな書道などに通じない者は、さういつたやうな氣持で、良寛和尚のやうな人に對するより他に道のない事を切に感ずるものである。

―相馬御風―

註―坡丈・榮重。共に詳しい傳記はわからない。何れも越後の人であるらしい。

―凋落より再生へ―

三六　しぐれ

私の今ゐるところは金澤の町でも、東京とくらべたら大方麻*布の奥か、それとも赤*坂の山の手あたりであらうか、樹が家を挾んで流れが多い。其の用水から、小流れを引いて庭に潺々たるせゝらぎを通じる家は、ほとんど軒並みだと言つてよい。そしてその流れが二三軒分の庭の垣根をくゞりぬけ、又用水へと注がれてゐる。それゆゑ、大概の家には小さい池がある。町の名からして川御亭といふ風流な呼び名をされてゐるが、まだ私はその縁起を知らない。往昔前*田家の屋敷でもあつたのか、それとも小流れを繞らした家が多いために、斯ういふ由緒ありげに呼ばれてゐるのかも知

れぬ。用水であるために水は少しも濁つてゐない。それに家々の前にある一尺ぐらゐの溝川の水まで、さら〳〵と一濁りもない美しさをもつてゐる。ときには、そんな二寸とない深さのせゝらぎに、石斑魚の子が走つてゐるのを見ると、市街であるとは言ひながら、今さら田舎の清閑を愛せずにゐられなかつた。町の人々は、びくに入れて十一月鮒を活かしておいたり、蜆貝の泥を吐かせたりしてゐる。

窓から隣家の柚子の實のつてゐるのが、降續いた微雨のなかにつや〳〵と濡れながら垂れてゐる。屋根は雨に濡れて消炭のやうな色をしてゐるせいか、柚子の肌の黄色さは輝くばかりである。そして空は灰ばんだ荒涼たる景色である。階下では子守唄が聞こえ、風あるごとに後庭の柿の葉の散落する音が夥しい。私は殆ど癖になつたやうに、用事もないのに外出の用意をして、市街の裏

町をぶら〳〵する。どういふ家にも柿の木があるやうに、どういふ家の庭々にも朱い葉の堆積を見ないことがない。それらの落葉は朝の間に濡れてゐたのか、すこしも乾いてゐない。私はなぜにこんなにまで柿の葉を感心するか分からないが、何か好きで耐らないのである。それから枳殻のまんまるいゴム玉のやうな黄色い實が、家々の垣根に光つてゐる。東京地方でいふ寒竹は、此處ではずつと葉並が廣く背丈も伸び、多くは垣根に生えてゐる。いまから冬にかけて芽時であるから、黒子のやうな色合ひの筍が、垣根を拔いてゐるのを見ると、何か物悲しい風情を感じた。幼時に、これを理由なく拔いた覺えがあるからである。

犀川へ出ると、四五日前に見た磧の草の色が一層こゆく、茜色や朱色になつたことに氣づいた。もう一日づゝ紅葉して、しまひに眞赤になつてしまふのであらう。そして枯れかゝる頃には、焦茶

色になつてしまふのだ。莖も葉もまるで眞赤だ。さういへばどうやら、夕日寒山を見るの想ひが次第に昂じて、山々の姿まで紅葉してゐる。峯の方はもう落寞とした瘠せた肩つきをしてゐた。此の間から飛行機が飛んでゐたので、鵜が網にかゝらないと鳥屋が言つてゐたことを思ひ出した。市中に澤山ゐた目白や、百舌や、鵜まで、演習があつて飛行機が飛んだら、みんな山の奥へ行つてしまつたとは聞いたが、その山奥にもあまりゐないと言ふ。そんなことを考へてみると、妙に心佗びしい氣がした。それに十年前に眺めた山々の姿が依然としてゐるのが、氣のせいか、一廻り小さくなつたやうな氣がしてならなかつた。そればかりではなく、何だか樹の姿にしても、昔とは小さくなつたやうに思はれてならなかつた。私自身が、子供の時に較べて大きくなつてゐたせいで、さう見えるのではなからうが、全く、醫王山や戸室、それから白山や、富士

寫ケ嶽の姿までが、あの時分から見ると、ずつと小さくなつて見えた。犀川にしても可愛げな流れになつて見えたのである。――私が國を出たときは二十一だつたが、それからさまゞ〳〵な土地を旅行してあるいたから、眼界が自ら廣がつたのかも知れないと思つた。も一つは、年をとると山河の姿にも、何時の間にか驚かされるのではないかとも思つた。

―室生犀星―

註―麻布。赤坂。共に東京市の西南部にあたつてゐる區名。
前田家。加賀の舊藩主の家。
犀川。金澤市を流れてゐる川。
醫王山。金澤市の東方越中境にある山。
戸室。金浦村の字になつてゐる。戸室山は醫王山の前峯である。
白山。加賀の國の東南境にある高山。
富士寫ケ嶽。山代、山中溫泉から見れば南東にあたつて聳えてる山。

三七　冬の日

窓開き飯食ひ居ればはつ冬の朝日さし來ぬ樂しかれ今日
—若山牧水—

いちはやく冬のマントをひきまはし銀座急げばふる霙かな
—北原白秋—

石一つ投ぐれば遠くこだまして冬の林は立つ鳥もなし
—尾上柴舟—

うれしくも見つる冬野の一すぢの水のほとりの水仙の色
—金子薫園—

冬の夜の街路をいそぐ旅人の俥のあとをわれも走らむ
—前田夕暮—

三八　落葉

毎年十月の二十日といへば、初霜を見る。雜木林や平坦な耕地の多い武藏野へ來る冬、淺々とした感じの好い都會の霜、さういふものを見慣れて居る君に、この山の上の霜をお目にかけたい。この桑畠へ三度か四度もあの霜が來て見給へ、桑の葉は忽ち縮み上がつて燒け焦げたやうに成る。畠の土はぼろ〳〵に爛れてしまふ……見ても恐ろしい。猛烈な冬の威力を示すものは、あの霜だ。そこへ行くと、雪の方はまだしも感じが柔かい。降積もる雪はむしろ平和な感じを抱かせる。

十月末のある朝のことであつた。私は家の裏口へ出て、深い秋雨のために、色づいた柿の葉が面白いやうに地へ下るのを見た。肉の厚い柿の葉は、霜のために燒け損はれたり、縮れたりはしない

が、朝日のあたつて來て霜のゆるむ頃には、重さに堪へないで脆く落ちる。しばらく私はそこに立つて、茫然と眺めて居た位だ。そして、其の朝は殊に烈しい霜の來たことを思つた。

十一月に入つて急に寒さを增した。三日の朝、起出て見ると、一面に霜が來て居て、桑畠も野菜畠も家々の屋根も皆白く見渡される。裏口の柿の葉は一時に落ちて、道も埋もれるばかりであつた。すこしも風は無い。それで居て、一葉二葉づゝ靜かに地へ下る。屋根の上の方で鳴く雀も、いつもよりは高くいさましさうに聞こえた。

空はどんよりとして、霧のために全く灰色に見えるやうな日だつた。私は勝手元の焚火に凍えた兩手を翳したくなつた。足袋をはいた爪先も寒くしみて、いかにも恐ろしい冬の近よつて來る

ことを感じた。この山の上に住むものは、十一月から翌年三月まで、殆ど五ケ月の冬を過ごさねばならぬ。その長い冬籠もりの用意をせねばならぬ。

木枯が吹いて來た。

十一月の中旬のことであつた。ある朝、私は潮の押寄せて來るやうな音に驚かされて、眼が覺めた。空を通る風の音だ。時々それが沈まつたかと思ふと、急にまた吹きつける。戸も鳴れば、障子も鳴る。殊に南向の障子には、バラ〳〵と木の葉のあたる音がして、其の間には千曲川の河音も平素から見るとずつと近く聞こえた。

障子を開けると、木の葉は部屋の内までも舞込んで來る。空は晴れて白い雲の見えるやうな日であつたが、裏の流れのところに

立つ柳などは、烈風に吹かれて髪を振ふやうに見えた。枯々とした桑畠に茶褐色に殘つた霜葉なども左右に吹靡いて居た。

其の日、私は學校の往きと還りとに停車場前の通りを横ぎつて、眞綿帽子やフランネルの布で頭を包んだ男だの、手拭を冠つて兩手を袖に隱した女だのの行過ぎるのに遇つた。往來の人々は、いづれも鼻汁を啜つたり、眼の側を紅くしたり、あるひは涙を流したりして、顏色は白つぽく、頰・耳・鼻の先だけは赤く成つて、身を縮め、頭をかゞめて、寒さうに歩いて居た。風を背にした人は飛ぶやうで、風に向かつて行く人は又、力を出して物を押すやうに見えた。

土も、岩も、人の皮膚の色も、私の眼には灰色に見えた。日光そのものが黃ばんだ灰色だ。その日の木枯が、野山を吹きまくる光景は凄まじく、烈しく、又勇ましくもあつた。樹木といふ樹木の枝を揉み、幹も動搖し、柳・竹の類は草のやうに靡いた。柿の實で梢に殘

つたのは吹落とされた。梅・李・櫻・欅・銀杏などの霜葉は、その一日で悉く落ちた。そして、そこ〻に聚まつた落葉が、風に吹かれては舞揚がつた。急に、山々の景色は淋しく、明かるく成つた。

—島崎藤村—

註—この山の上。長野縣小諸町のこと。
千曲川。信濃の中央を流れて越後に下り、日本海に注ぐ川。

三九　枯林

或朝の事で、普通には霜をれのしたといはれてゐる、うら寒い曇つた日に、江戸川上流の堤をさまよつた。霜は白く刈田の上にお*き、堤の枯草の葉に結び、掃集められでもせられさうに、眞白く見えてゐるが、いつも霜の朝には見える、華やかな麗はしい日光も、今朝

は隱れて、灰色の雲が深く、雀の鳴き聲も折々じい〳〵と寒げに聞こえて來る許り、寒さは肌に沁みて、なべてこの景色が何となく、頭の上から壓するやうだ。ふと此の時、頭上で、から〳〵と鳴る音を聞いた。見上げると、樹上に立並ぶさいかちの樹の梢に、莢と莢とが相觸れて音を立てるのであつた。復た、から〳〵と鳴る。

寂しい響、思はず立止まつて傾聽せずにはゐられない。下にはあるとも思はれない風の、梢高く來て觸れるのか、それとも莢の中なるさいかちの實の自づと搖らいで發する響であるか、自然の物音の中で、此れ程寂しい思をさせる物は無い。靜かな日に、林の中で自づと落ちる松かさの響や、夜更けて後庭つゞきの柴山に、ぽつぽつと落ちる栗の實の音、孰れも靜寂の感に耐へざらしめるが、霜枯のした川添ひ道、さいかちの實のから〳〵と鳴るのを聞く程寂しいものは無い。じつと眼を閉ぢて聽いてゐると、其の響が胸に

しみ込み、身はさながら靜寂の中へ消え去つてしまふかのやうに思はれる。

折ふし墓場などへ行つて見ると、四邊の靜寂の中で墓標の榊の音のみが、獨りさら〳〵と音立ててゐることがある。周圍の寂しいだけ其の物音は、不思議な感を起こさせる。さいかちの實の鳴るのも同樣で、寂しさの中心は其の物音に繫がれてゐるかのやう、聽く者の身も心も其の物音に引込まれ、われ獨りといふやうの感じがひし〳〵と胸に迫つて來る。

或夕暮、獨り桑畑の間の小徑を辿つて行つた。葉の盡く落ちつくした桑枝に風が鳴つて、乾いた畔の土からふつと吹かれて飛ぶ。其の時の物寂しさ。畠の向かふには櫟林が一帶に立つてゐて、ざあざあと騷ぎ立て、其の葉は一片二片風にちぎれて飛んで行く。いつたい櫟の木は、冬にも葉が落ちず、其の黃ばんだ枯葉は、春四月

の下旬新芽のふくのを待つて落ちるのであるが、他の枯木の林の中に雜つてゐると、嵐の吹過ぎる毎に、風が來たと全林に告知らすやうに、身を振るはせて鳴つてゐるのである。それに加へて此の櫟林の多くは、畠の畔、村落の外廓などを形づくつてゐる。武藏野あたりに多く見る松林、楢林などの中へ這入つて行くには、是非一度此の木の群立の中を通らずには行かれない。

畠中の小徑は導いて、櫟林から、落葉松林の中へ這入つて行つた。冬枯の落葉松林、此れ程寂しい思をさせるものが他にあらうか。杉林の幽遠な趣もなく、雜木林の稍賑やかな懷かしい感も起こさせず、一層荒凉な、一層寂寥の感に耐へざらしめる。

殊に此の林が風に吹曝される高原の上とか、燒野の原などに立つてゐる時は、一層此の趣が強い。淺間山の麓、追分の原などへ行つて見ると、黑ずんだ燒岩が所々枯野の中に埋まつてゐて、草深い

北國街道の上には一人の行客の姿も見えず、灰色に曇る空の上に淺間の煙が直ぐに登つて行く。此の時原へ來て、處々に散在してゐる落葉松の林へ這入つて見る。四方の山は雪が白く、原の上にも、林の中にもまだ消え殘つてゐる。そして樹の幹の色は年を經て黯く、枝からは兎絲が垂れさがつてゐる。暫し樹幹に倚つて、眼を閉ぢて默想して見たまへ。自分一人永しへに無人の野に捨てられたやうな思か、然らずば、自然の力の如何にも怖ろしく、人の世の敗滅し行く姿に觸れるやうな思がするに違ひない。

徑は次第に遠く、林は深くなる。林の奥からは何か怖ろしいものの吐息が聞こえるやうで、私は思はず引返して林を出た。林の外はもう夕闇が迫つて、村の端れには燈火の影が見えてゐた。

時とすると、冬には稀に、靜穩な溫い天氣のあるもので、斯樣な日の朝など、獵銃を肩にして枯林の中へ這入つて行く。空が紺青に

澄渡つて、日の光が直射すると、樹々の梢は遮る何物も無いので、眩ゆさうに搖れて、霜の華は滴となつて、ぽた〳〵と落ちる。遠くの方には、杉の森が鬱然として其の影をさかしまに空の鏡に映すやうで、其の頂が互に首肯き合ひ、何か相談でもしてゐるやうに思はれる。それが破れたらば、今にも嵐となつて荒れだすかと思ふが、其のまゝまたやんでしまふ。

林の中は靜かであるが、何處からか丁々と斧の音が聞こえ、さあつと枝の空を切る音、どつと幹の倒れる音がし、人聲が交つて來る。其の音をたよりに進んで行くと、三四人の人が勢好く鉈を振るひ、斧を振上げて、枝を拂つてゐる。傍には焚火がしてあり、焚火の周圍には背負子を敷いて座が設けてある。其の火の傍へ行き、火にあたりながら、何處へ行つたならば獲物が多からうと訊くと、

「冬は兎は笹原の中にゐますぞ、南山へ行つて御覽じろ。」

と、鉈の手も休めず、勢よく楢の枝を切拂ひながら教へてくれる。

すると、他の一人、連りに鎌を研いでゐるのが、

「燒山が好い。燒山にはきつと一羽や二羽の雉子はゐますぞ。」

といふ。自分は教へられるまゝに、また銃を肩にして其處を出た。

次第に遠くなるにつれて、斧の音も鉈の音も聞こえずなる。此の時、風が一陣颯と吹過ぎて、頭上の枝と枝とが打合つて、からん〳〵と鳴る。白樺の幹の皮は、白くほけて、小さく剝げて飛んで行く。風の過ぎた後は一層ひつそりとなる。

小徑はやゝ下つて欅の樹、榎の樹などの下を辿つて行く。其の幹の、如何にも巨大なのに比して、枝振のしなやかに、極めて微細な梢の端の端までも分かれて居るのが、如何にも微妙といふ感じを起こさせる。

雜木林を出て、教へられた南山へ行つたが一匹の兎も居ない。

燒山へも出た。けれども同じく一羽の雉子を見かけず、一日駈廻つて疲れて歸つて來た。

—吉江喬松—

註—江戸川。井頭川の末で、東京府豐多摩郡落合村で井草川を入れ、目白臺の下に流れ下るに至つて江戸川と呼ばれてゐる。

追分。小諸の東三里半。木曾路と善光寺路との分岐點になつてゐる。

南山。燒山。作者の鄕里の山でもあるが、共に著明な高山ではない。

四〇 雪

雪はふる！　雪はふる！
見よかし、天の祭なり！
空なる神の殿堂に

冬の祭ぞ酣なる！
たえまなく雪はふる
踊れかし、鵜等よ！
うたへかし、鴨等！
ふる雪の白さの中にて！
いと聖く雪はふる、
沈默の中に散る花瓣！
雪はしとやかに
踊りつゝ地上に來る。

雪はふる！　雪はふる！
白き翼の聖天使！

吾等が庭に身のまはりに
さゝやき歌ひ雪はふる！

ふり來るは惠の麵麭なり！
小さく白き雪の足！

地上にも屋根の上にも
いと白く雪はふる。

―堀口大學―

四一　雪

朝ぼらけ有明の月と見るまでに
　よし野の里にふれるしら雪

これは降積んだ雪を朝戸開けて月と見まがつたのである。降積んだ雪も美しいが、大空を傾けて盛んに降りしきる雪景色は、月には見られぬ眺である。「雪似鵞毛飛散亂。人被鶴氅立徘徊。」と白樂天は歌つた。銀砂を散らすやうに、玉屑を降らすやうに、見て居る中に、乾坤すべて一白。氷山峨々たる北國の地では、面白いよりも寧ろすさまじい景色であらうが、我が國の秀麗な山川を降埋める變化の奇觀は、芭蕉翁でなくても、

　いざさらば雪見に轉ぶ處まで

の感を起こす。さはいへ、

駒とめて袖打拂ふ蔭もなし

佐野のわたりの雪のゆふ暮

にはさびしい感がある。「雪のふる日は寒くこそあれ。」雪の風流は稍冷たいものである。川柳子は、

雪見にはばかと氣の附く處まで

と言つた。

安藤冠里は大名で、俳句の達人であつた。雪の朝、酒屋の小僧が、跣で街上を往還するのを見て、

雪の日やあれも人の子樽ひろひ

暖衣飽食、食ふに魚あり、出づるに輿ある大名の身分として、下をあはれむ此の心がなくてはならぬ。風流も仁恕の道に合しなければならぬ。

同じく俳人の西島といふ人、夕方から降りしきる雪の景色の面

白さに、いざ雪見に出かけようと丁稚に供を命じた。西島の妻は、「風流の心ある人には、雪見も面白からうが、みやびを知らぬ丁稚の身にとつては、どれ程つらからう。自分の子ならば、よも供にはつれられまい。」と、

我が子なら供にはやらじ夜の雪

西島手を拍つて、「此の名句を得たれば、今日の雪見は十分である。最早出かけるには及ばぬ。」と言つたとは、此の妻にして此の夫、かくてこそ風流の眞意を知つたものと言つてよい。

むかし、延喜の帝は、雪の降つた寒夜に御衣を脱せられて、「聊か民の苦を思ひやる。」と仰せられた。古事談には一條天皇にも同じ話を傳へて居る。此の仁慈の御行は、よく臣民を感泣せしめるに足りる。昭憲皇太后の御歌に、

あや錦とり重ねても思ふかな

寒さおほはん袖もなき身を
仁愛の御心は同じである。　—芳賀矢一—

註—白樂天。支那唐代の詩人。
安藤冠里。奥州岩城平の藩主信博の子で名は信友。吉宗に仕へて老中となつた。享保十七年卒、年六十二。
西島。この逸話は續俳家奇人談に載つてゐる。妻はとめ女と云つたとのこと。
延喜の帝。醍醐天皇の御事。

四二　沼のほとり

空晴れて風もない早春の
大きい沼のほとりは和ぎに溢れる、
雪消えの畑に麥はわづかに靑く
通りかゝつた赤ら顔の二人の娘は

どこかの泥濘に踏みこんだらしい下駄を手に
泥の跣足で
不思議さうに私を見送る。

沼は嚴冬を過ぎた面影を
黑き枯葦の群にのこし、
今は柔らかく光をうけて漫々たる水
澄みもせず濁りもせず
岸に繫がる一つの古い小舟は、
石斧や矢の根石で生活した頃の人を待つかのやう、
ひろ〳〵した沖には
無數の鴨が靜かに樂しさうに
松かさを散らしたやうに小さく浮かんでゐる。

この沼のほとりは此の冬に
やうやく新道が開けたので
どこか原始の匂ひがある、
斯うした路を心のどかに通るのは
純なる祈りの喜びである。

—白鳥省吾—

四三　春の雪

もう二三日で彼岸だといふのに、昨日今日の寒さと雪の降りやうは、何といふことであらう。此の冬は年の暮から正月へかけて不思議に快晴の日が多く、氣溫も高く、雪も降らなかつた。

「なんといふ暖かないゝお正月だらう。でも雪がないと何だか

本當にお正月らしい氣持がしなくて物足りないね。」かうした贅澤めいた言葉をすら私達が取交はしてゐたほどに、今年の正月は北國の正月らしくなかつた。「今年はもうこんな風にろく〳〵雪が降らないで、春になるのではなからうか。」時に又私達はそんなに思つたりしたこともあつた。しかし、私達のさうした言葉を聞くことを、老人達は嘲笑ひでもするやうにいふのであつた。

「そんな筈はありませんや。降るべき時に雪が降らぬと、いつまでもいつまでも春ぎたないものだ。」

更に又彼等はいつた。

「昔から彼岸過ぎても七はだれつてことをいひますが、かういふ年はとかくそのやうになり勝ちなものでね。」

いかにも、さうした老人達の言葉通りであつた。此の頃は何だか正月とは反對に、こんな風ではこれから又、冬に逆戻りするので

はないかといふ心細い氣持さへするのである。

それにしても、老人達が口癖のやうにいふ「春ぎたない」とか、「七はだれ」とかいつたやうな言葉は、何といふ味はひの深いことであらう。暦の上ではすつかりもう春になつてゐながら、いつまでもいつまでも寒さが薄らがない。雪が降る。霰が散る。さうした有様を誰がいひだしたともなく、「春ぎたない」といふやうな短い言葉で現はし、それが又いつしか立派な成語となつてゐる。それから又、彼岸過ぎになつても、まだ時々雪が降つたり霙が降つたりして、容易に春になり切らない。――それには更に「彼岸すぎても七はだれ。」といふ諺めいた通用語が出來てゐる。かうした言葉はその初め誰がいひ出したかは知るよしもないが、いつとはなしにその地方の通用語となつてゐる。――その事が私達には今更の如く興味深く感じられるのである。

わが國の上古人の間には、言葉の神祕性を現はす爲に、「言靈（ことだま）」といふやうな言葉があつたが、まつたく言語の生成といふ事には底の知れない微妙さがある。わが國上代人の好んで用ひたかの枕詞といふ、一種特別な言葉の使用法の如きも、それがどうして生まれたか、何人がそれを最初に用ひたか、どうしてそれが廣く用ひられるやうになつたか、といふやうな事を考へると、そこには果てしない興味が湧くのを覺える。「妻」には「わか草」「うき寢」には「水鳥の」、「黑き」には「ぬば玉の」「ひとり」には「かしのみの」「みち」には「玉ぼこの」「みだれ」には「ときぎぬの」「長き」には「菅の根の」といふやうに、或語を言出さうとする時に調べをとゝのへるべく、その上に被らせて用ひる一定の語がかうしてちやんと出來上がるまでには、どんなに微妙な經過があつたことであらう。そんな事まで今更のやうに思ひ合はされるのである。

ツルゲーネフだつたかの作の中に、柏の木といふものは新らしい芽が出なければ、古い葉が落ちないといふやうな事が書いてあつた。それを讀んで以來、私は毎年早春の季節になると、干からびた大きな葉をしふねく着けてゐる柏の樹に、格別注意するやうになつた。そして、

新らしき芽ぶきを待ちし柏木の枯葉もいつか散りにけるかも

新らしき芽ぶきを待ちてちるといふ柏の枯葉見ればいとしも

いつぞやこんな歌をよんだことさへあつた。

つい此の間も、私はある家の前庭に立つてゐる一本の大きな柏の木を見ながら、人々とその樹のさうした特性について語り合つた。深く積もつた雪の中では、とりわけ木々の姿が目につくものである。常磐樹の緑の色も、雪中見ると格別の趣がある。葉の落ちつくしたさま〳〵な樹の幹と枝との面白味も、雪の中で眺めると一層強く感じられる。が、さうした中にあつて、とりわけ私の目を惹くのは、あの澤山の大きな枯葉をしつかりと枝につけたまゝ立つてゐる柏の樹である。その重なり合つて枝にしがみついてゐる柏の枯葉が、寒い風に吹かれて、鳴つてゐる一種異様な音も、私には何となく深くさびしさを誘つてゐるやうに聞こえる。

「柏の木だけは、なぜあんなに冬になつても、葉を落とさないのだらう。」と一人が言つた。

「冬中ひどい風に揉まれながら、あんな風に落ちないところを見ると、よほどしつかり喰付いてゐるものと見えるねえ。」他の一人が言つた。

「さうだ、風どころか人間の手で、もぎ取らうとしたつて容易に離

れないほど、かたく喰付いてゐるよ。」と、更に他の一人が言つた。

「ところがね、それほどしふねく喰付いてゐるあの枯葉も、春になつて新らしい芽が出て來ると、いつの間にか散つてしまふんだからね。自然の作用つて全く不思議なもんだよ。」

こんなことを言つたものもあつた。

ところが、かうして他の樹々に交らずに雪の中でも枯葉を落とさずにゐる柏の樹を見ると、不思議に心をひきつけられるが、それでゐて春になつて新芽の伸出るのを待つて、その枯葉を落とす折の柏の木の風情を誰一人私達の間で注意して來たものがない。

「さうはいふものの、誰か柏の枯葉の散るところを注意して見たものがあるかい。」その折もこんなことを一人がいひ出したので、私達は皆一緒に大笑ひしたのであつた。それほど柏の木の枯葉が落ちて新芽の出るのは人目に立たないことなのである。まつ

たく文字通りに「いつしかに」である。

だが、これは柏の樹の枯葉の散るのについてばかりでなく、總じて自然界に於ける生命の活動や季節の推移には、この「いつしかに」が多い。隨つて自然界の推移の形容詞には、此の「いつしかに」といふ言葉が最もふさはしい。自然界の推移どころか、此の私自身の生涯すらも顧みれぼ凡ては此の「いつしかに」でいひ盡くされ得るやうな氣さへするのである。

—相馬御風—

註—ツルゲネーフ。露西亞の文學者。（西暦一八一八—一八八三）

第二讀本　卷二終

文部省檢定濟
昭和二年十二月六日　中學校國語科用

第二讀本

大正十五年十二月十日　印刷
大正十五年十二月十五日　發行
昭和二年十一月五日訂正再版印刷
昭和二年十一月十日訂正再版發行

卷數	定價	昭和三年度臨時定價
5	金五拾五錢	金八拾八錢
4	金五拾貳錢	金八拾六錢
3	金五拾錢	金八拾參錢
2	金四拾八錢	金八拾錢
1		

編纂者　齋藤清衛

發行兼印刷者　京都市上京區丸太町通堀川西入西丸太町百七十一番地　星野敬一

發行所　京都市丸太町堀川振替口座大阪四九四九一番　電話西陣三〇三五番　四八三七番　星野書店

星野書店印刷部印刷

本科第一學年四組

小森喜代

広島大学図書
2000019637

K.K